

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2008-103066

(43)Date of publication of application : 01.05.2008

(51)Int.Cl. G11B 20/12 (2006. 01)
 G11B 27/10 (2006. 01)
 G11B 27/00 (2006. 01)
 G11B 20/10 (2006. 01)
 H04N 5/91 (2006. 01)
 H04N 5/93 (2006. 01)

(21)Application number : 2007-265850

(71)Applicant : MATSUSHITA ELECTRIC IND CO
 LTD

(22)Date of filing : 11.10.2007

(72)Inventor : IKEDA KO
 IWAMOTO KEIMEI
 OKADA TOMOYUKI

(30)Priority

Priority number : 2003352913
 2003379758

Priority date : 10.10.2003
 10.11.2003

Priority country : JP
 JP

(54) RECORDING MEDIUM, REPRODUCING DEVICE, RECORDING METHOD, AND REPRODUCING METHOD

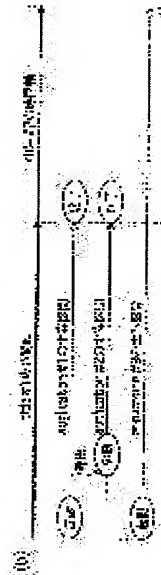
(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a recording medium in which the generation of an excessive read load can be averted even if there is backward reproduction in a reproduction time axis.

SOLUTION: An index table, an operation mode object, and a Java (R) application are recorded in a BD-ROM. The Java (R) application is a program described in a programming language for a virtual machine, and an application management table indicates one or more applications which are eventually controlled by managing the title corresponding to the operation mode object as an existence section. The application indicated by the application management table includes the application which is not automatically started but can be started according to the application call from other applications.

(8)

Index	Operation Mode	Application	Existence
0001	Normal	Application 1	Existence
0002	Normal	Application 2	Existence
0003	Normal	Application 3	Existence
0004	Normal	Application 4	Existence
0005	Normal	Application 5	Existence
0006	Normal	Application 6	Existence
0007	Normal	Application 7	Existence
0008	Normal	Application 8	Existence
0009	Normal	Application 9	Existence
0010	Normal	Application 10	Existence



(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第4117019号
(P4117019)

(45) 発行日 平成20年7月9日(2008.7.9)

(24) 登録日 平成20年4月25日(2008.4.25)

(51) Int. Cl.

F I

G 1 1 B 20/10 (2006.01)**G 1 1 B 20/10 3 O 1 Z****G 1 1 B 27/00 (2006.01)****G 1 1 B 27/00 D****H O 4 N 5/91 (2006.01)****H O 4 N 5/91 Z**

請求項の数 4 (全 61 頁)

(21) 出願番号 特願2007-265850 (P2007-265850)
 (22) 出願日 平成19年10月11日(2007.10.11)
 (62) 分割の表示 特願2005-514677 (P2005-514677)
 の分割
 原出願日 平成16年10月12日(2004.10.12)
 (65) 公開番号 特開2008-103066 (P2008-103066A)
 (43) 公開日 平成20年5月1日(2008.5.1)
 審査請求日 平成19年10月12日(2007.10.12)
 (31) 優先権主張番号 特願2003-352913 (P2003-352913)
 (32) 優先日 平成15年10月10日(2003.10.10)
 (33) 優先権主張国 日本国(JP)
 (31) 優先権主張番号 特願2003-379758 (P2003-379758)
 (32) 優先日 平成15年11月10日(2003.11.10)
 (33) 優先権主張国 日本国(JP)

早期審査対象出願

(73) 特許権者 000005821
 松下電器産業株式会社
 大阪府門真市大字門真1006番地
 (74) 代理人 100090446
 弁理士 中島 司朗
 (74) 代理人 100072442
 弁理士 松村 修治
 (74) 代理人 100125597
 弁理士 小林 国人
 (72) 発明者 池田 航
 大阪府門真市大字門真1006番地 松下
 電器産業株式会社内
 (72) 発明者 岩本 啓明
 大阪府門真市大字門真1006番地 松下
 電器産業株式会社内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 記録媒体、再生装置、記録方法、再生方法

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

インデックステーブルと、アプリケーションと、動作モードオブジェクトとが記録された記録媒体であって、

前記インデックステーブルは、タイトルと、動作モードオブジェクトとの対応付けを示すとともに、各タイトルに対応する動作モードオブジェクトが、ムービーモード用及び仮想マシンモード用の何れであることを示し、

ムービーモード用の動作モードオブジェクトは、制御手順を表すナビゲーションコマンドを含み、

仮想マシンモード用の動作モードオブジェクトは、アプリケーション管理テーブルを含み、

前記アプリケーションは、仮想マシン向けプログラミング言語で記述されたプログラムであり、

アプリケーション管理テーブルは、前記動作モードオブジェクトに対応するタイトルを、生存区間として管理することで制御されることになる1つ以上のアプリケーションを示し、

アプリケーション管理テーブルにて示されるアプリケーションは、

自動起動されないが、他のアプリケーションからのアプリケーション呼出に応じて、起動することができるアプリケーションである

ことを特徴とする記録媒体。

10

20

【請求項2】

記録媒体に記録されたタイトルを再生すると共に、アプリケーションを実行する再生装置であって、

インデックステーブルに基づき、複数タイトルの中から、これから再生しようとするタイトルであるカレントタイトルとなるものを選ぶモジュールマネージャと、

アプリケーションを実行するモジュールとを備え、

前記記録媒体は、インデックステーブルと、アプリケーションと、動作モードオブジェクトとが記録され、

前記インデックステーブルは、タイトルと、動作モードオブジェクトとの対応付けを示すとともに、各タイトルに対応する動作モードオブジェクトが、ムービーモード用及び仮想マシンモード用の何れであることを示し、

ムービーモード用の動作モードオブジェクトは、制御手順を表すナビゲーションコマンドを含み、

仮想マシンモード用の動作モードオブジェクトは、アプリケーション管理テーブルを含み、

前記アプリケーションは、仮想マシン向けプログラミング言語で記述されたプログラムであり、

アプリケーション管理テーブルは、前記動作モードオブジェクトに対応するタイトルを、生存区間として管理することで制御されることになる1つ以上のアプリケーションを示し、

アプリケーション管理テーブルにて示されるアプリケーションは、自動起動されないが、他のアプリケーションからのアプリケーション呼出に応じて、起動することができるアプリケーションであり、

前記モジュールは、

カレントタイトルを生存区間とするアプリケーションであって、自動起動されないものを、他のアプリケーションからのアプリケーション呼出に応じて、起動するアプリケーションマネージャを含む

ことを特徴とする再生装置。

【請求項3】

ボリュームデータを生成して、ボリュームデータが記録された記録媒体を得る記録方法であって、

ボリュームデータは、インデックステーブルと、アプリケーションと、動作モードオブジェクトとを含み

前記インデックステーブルは、タイトルと、動作モードオブジェクトとの対応付けを示すとともに、各タイトルに対応する動作モードオブジェクトが、ムービーモード用及び仮想マシンモード用の何れであることを示し、

ムービーモード用の動作モードオブジェクトは、制御手順を表すナビゲーションコマンドを含み、

仮想マシンモード用の動作モードオブジェクトは、アプリケーション管理テーブルを含み、

前記アプリケーションは、仮想マシン向けプログラミング言語で記述されたプログラムであり、

アプリケーション管理テーブルは、前記動作モードオブジェクトに対応するタイトルを、生存区間として管理することで制御されることになる1つ以上のアプリケーションを示し、

アプリケーション管理テーブルにて示されるアプリケーションは、

自動起動されないが、他のアプリケーションからのアプリケーション呼出に応じて、起動することができるアプリケーションである

ことを特徴とする記録方法。

【請求項4】

10

20

30

40

50

記録媒体に記録されたタイトルを再生すると共に、アプリケーションを実行する再生方法であって、

インデックステーブルに基づき、複数タイトルの中から、これから再生しようとするタイトルであるカレントタイトルとなるものを選ぶマネージャステップと、

アプリケーションを実行するモジュールステップとを含み、

記録媒体には、インデックステーブルと、アプリケーションと、動作モードオブジェクトとが記録されており、

前記インデックステーブルは、タイトルと、動作モードオブジェクトとの対応付けを示すとともに、各タイトルに対応する動作モードオブジェクトが、ムービーモード用及び仮想マシンモード用の何れであるかを示し、

ムービーモード用の動作モードオブジェクトは、制御手順を表すナビゲーションコマンドを含み、

仮想マシンモード用の動作モードオブジェクトは、アプリケーション管理テーブルを含み、

前記アプリケーションは、仮想マシン向けプログラミング言語で記述されたプログラムであり、

アプリケーション管理テーブルは、前記動作モードオブジェクトに対応するタイトルを、生存区間として管理することで制御されることになる1つ以上のアプリケーションを示し、

アプリケーション管理テーブルにて示されるアプリケーションは、自動起動されないが、他のアプリケーションからのアプリケーション呼出に応じて、起動することができるアプリケーションであり、

前記モジュールステップは、

カレントタイトルを生存区間とするアプリケーションであって、自動起動されないものを、他のアプリケーションからのアプリケーション呼出に応じて、起動する

ことを特徴とする再生方法。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、デジタル化された映像の再生と、アプリケーションの実行とを同時に実行する、再生制御技術の技術分野に属する発明であり、本再生制御技術を記録媒体、民生用の再生装置、プログラムに応用する場合の応用技術に深く係る。

【背景技術】

【0002】

記録媒体を用いた映画ビジネスには、デジタル化された映画作品と、オンラインショッピング用のアプリケーションとを同じ記録媒体に記録して販売するという販売戦略がある。映画作品に関連するキャラクタ・グッズを、オンラインで販売するような仕組みを一枚の記録媒体に組み込めば、映画作品と、アプリケーションとの相乗効果により、キャラクタ・グッズの売り上げを高めることができるのではないかという、制作者側の目論見がある。かかるコンテンツを実現するにあたって、今後登場する記録媒体及び再生装置には、より自由度が高いアプリケーション実行環境の整備が要望されている。

【0003】

ここでかかるデジタル化された映画作品と、オンラインショッピング用のアプリケーションとの同時実行を実現するには、デジタル映像の再生に従って、アプリケーションを動作させるという技術が必要になる。デジタルストリームの再生に従って、Javaアプリケーションを動作させる技術としては、DVB-MHP規格における“シグナリング”が知られている。シグナリングとは、デジタルストリームの再生時間軸において、アプリケーションを起動すべき時点、終了させるべき時点を定義しておき、この時点に、AIT(application Information Table)と呼ばれる情報を送信して、このAITに従った制御を再生装置に行わせるというものである。

10

20

30

40

50

【0004】

かかる背景技術には、以下に示される文献公知発明が存在する。

【特許文献1】特許第2813245号

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

しかしながらディスクコンテンツの再生進行は、再生時間軸の逆方向がありうる。逆行とは、巻戻しにより時間軸を逆方向に進行することである。アプリケーションを起動すべき時点、終了させるべき時点の前後でこの逆行と、進行とが何度もなされ、いったりきたりが繰り返されれば、ワークメモリへのロード、廃棄が何度もなされ、余分な読出負荷が生じてしまう。

10

【0006】

本発明の目的は、再生時間軸において再生の逆行があつたとしても、余分な読出負荷の発生を避けることができる記録媒体を提供することである。

【課題を解決するための手段】

【0007】

上記課題を解決するため、本発明にかかる記録媒体は、インデックステーブルと、アプリケーションと、動作モードオブジェクトとが記録された記録媒体であつて、前記インデックステーブルは、タイトルと、動作モードオブジェクトとの対応付けを示すとともに、各タイトルに対応する動作モードオブジェクトが、ムービーモード用及び仮想マシンモード用の何れであるかを示し、前記動作モードオブジェクトには、ムービーモード用のものと、仮想マシンモード用のものとがあり、ムービーモード用の動作モードオブジェクトは、制御手順を表すナビゲーションコマンドを含み、仮想マシンモード用の動作モードオブジェクトは、アプリケーション管理テーブルを含み、前記アプリケーションは、仮想マシン向けプログラミング言語で記述されたプログラムであり、アプリケーション管理テーブルは、前記動作モードオブジェクトに対応するタイトルを、生存区間として管理することで制御されることになる1つ以上のアプリケーションを示し、アプリケーション管理テーブルにて示されるアプリケーションは、自動起動されないが、他のアプリケーションからのアプリケーション呼出に応じて、起動することができるアプリケーションであることを特徴としている。

20

30

【発明の効果】

【0008】

前記アプリケーション管理テーブルは、前記動作モードオブジェクトに対応するタイトルを、生存区間として管理することで制御されることになる1つ以上のアプリケーションを示しているため、たとえ一個のタイトルにおける時間軸内において巻戻しがあつたとしても、タイトル選択がなされる前の直前タイトルまで、再生は逆行することはない。タイトルは、“再生の逆行が有り得ない単位”であり、このタイトルを元に、アプリケーションの生存区間を規定すれば、ワークメモリへの読み込み、廃棄が何度も繰り返されることはない。読み込み、廃棄の繰り返しがなくなるので、余分な読出負荷の発生を避けることができる。

40

【発明を実施するための最良の形態】

【0009】

(第1実施形態)

以降、本発明に係る再生装置の実施形態について説明する。先ず始めに、本発明に係る再生装置の実施行為のうち、使用行為についての形態を説明する。図1は、本発明に係る再生装置の、使用行為についての形態を示す図である。図1において、本発明に係る再生装置は再生装置200であり、テレビ300、リモコン400と共にホームシアターシステムを形成する。

【0010】

このBD-ROM100は、再生装置200、リモコン300、テレビ400により形成され

50

るホームシアターシステムに、映画作品を供給するという用途に供される。

以上が本発明に係る再生装置の使用形態についての説明である。

続いて本発明に係る再生装置の再生の対象となる、記録媒体であるBD-ROMについて説明する。BD-ROMにより、ホームシアターシステムに供給されるディスクコンテンツは、互いに分岐可能な複数タイトルから構成される。各タイトルは、1つ以上のプレイリストと、このプレイリストを用いた動的な制御手順とからなる。

【0011】

プレイリストとは、1つ以上のデジタルストリームと、そのデジタルストリームにおける再生経路とから構成され、“時間軸”の概念をもつBD-ROM上のアクセス単位である。以上のプレイリストと、動的な制御手順とを包含しているため、タイトルはデジタルストリーム特有の時間軸の概念と、コンピュータプログラ的な性質とを併せもっている。

図2は、BD-ROMにおけるファイル・ディレクトリ構成を示す図である。本図においてBD-ROMには、Rootディレクトリの下に、BDMVディレクトリがある。

【0012】

BDMVディレクトリには、拡張子bdmvが付与されたファイル(index.bdmv, MovieObject.bdmv)と、拡張子BD-Jが付与されたファイル(00001.BD-J, 00002.BD-J, 00003.BD-J)がある。そしてこのBDMVディレクトリの配下には、更にPLAYLISTディレクトリ、CLIPINFディレクトリ、STREAMディレクトリ、BDARディレクトリと呼ばれる4つのサブディレクトリが存在する。

【0013】

PLAYLISTディレクトリには、拡張子mplsが付与されたファイル(00001.mpls, 00002.mpls, 00003.mpls)がある。

CLIPINFディレクトリには、拡張子clpiが付与されたファイル(00001.clpi, 00002.clpi, 00003.clpi)がある。

STREAMディレクトリには、拡張子m2tsが付与されたファイル(00001.m2ts, 00002.m2ts, 00003.m2ts)がある。

【0014】

BDARディレクトリには、拡張子jarが付与されたファイル(00001.jar, 00002.jar, 00003.jar)がある。以上のディレクトリ構造により、互いに異なる種別の複数ファイルが、BD-ROM上に配置されていることがわかる。

本図において拡張子.m2tsが付与されたファイル(00001.m2ts, 00002.m2ts, 00003.m2ts, ...)は、AVClipを格納している。AVClipには、MainClip、SubClipといった種別がある。MainClipは、ビデオストリーム、オーディオストリーム、プレゼンテーショングラフィックスストリーム、インタラクティブグラフィックスストリームというような複数エレメントリストリームを多重化することで得られたデジタルストリームである。

【0015】

SubClipは、オーディオストリーム、グラフィックスストリーム、テキスト字幕ストリーム等、1つのエレメントリストリームのみにあたるデジタルストリームである。

拡張子“clpi”が付与されたファイル(00001.clpi, 00002.clpi, 00003.clpi, ...)は、AVClipのそれぞれに1対1に対応する管理情報である。管理情報故に、Clip情報は、AVClipにおけるストリームの符号化形式、フレームレート、ビットレート、解像度等の情報や、頭出し位置を示すEP_mapをもっている。

【0016】

拡張子“mpls”が付与されたファイル(00001.mpls, 00002.mpls, 00003.mpls, ...)は、プレイリスト情報を格納したファイルである。プレイリスト情報は、AVClipを参照してプレイリストを定義する情報である。プレイリストは、MainPath情報、PLMark情報、SubPath情報から構成される。

MainPath情報は、複数のPlayItem情報からなる。PlayItemとは、1つ以上のAVClip時間軸上において、In_Time, Out_Timeを指定することで定義される再生区間である。PlayItem情報を複数配置させることで、複数再生区間からなるプレイリスト(PL)が定義される。

図3は、AVClipと、PLとの関係を示す図である。第1段目はAVClipがもつ時間軸を示し、第2段目は、PLがもつ時間軸を示す。PL情報は、PlayItem#1, #2, #3という3つのPlayItem情報を含んでおり、これらPlayItem#1, #2, #3のIn_time, Out_timeにより、3つの再生区間が定義されることになる。これらの再生区間を配列させると、AVClip時間軸とは異なる時間軸が定義されることになる。これが第2段目に示すPL時間軸である。このように、PlayItem情報の定義により、AVClipとは異なる時間軸の定義が可能になる。

【0017】

AVClipに対する指定は、原則1つであるが、複数AVClipに対する一括指定もあり得る。この一括指定は、PlayItem情報における複数のClip_Information_file_nameによりなされる。図4は、4つのClip_Information_file_nameによりなされた一括指定を示す図である。本図において第1段目～第4段目は、4つのAVClip時間軸(AVClip#1, #2, #3, #4の時間軸)を示し、第5段目は、PL時間軸を示す。PlayItem情報が有する、4つのClip_Information_file_nameにて、これら4つの時間軸が指定されている。こうすることで、PlayItemが有するIn_time, Out_timeにより、択一的に再生可能な4つの再生区間が定義されることになる。これにより、PL時間軸には、切り換え可能な複数アングル映像からなる区間(いわゆるマルチアングル区間)が定義されることになる。

【0018】

PLmark情報は、PL時間軸のうち、任意の区間を、チャプターとして指定する情報である。図5は、PLmarkによるチャプター定義を示す図である。本図において第1段目は、AVClip時間軸を示し、第2段目はPL時間軸を示す。図中の矢印pk1, 2は、PLmarkにおけるPlayItem指定(ref_to_PlayItem_Id)と、一時点の指定(mark_time_stamp)とを示す。これらの指定によりPL時間軸には、3つのチャプター(Chapter#1, #2, #3)が定義されることになる。

【0019】

SubPath情報は、複数のSubPlayItem情報からなる。SubPlayItem情報は、SubClipの時間軸上にIn_Time, Out_Timeを指定することで再生区間を定義する。またSubPlayItem情報は、SubClip時間軸上の再生区間を、PL時間軸に同期させるという同期指定が可能であり、この同期指定により、PL時間軸と、SubPlayItem情報時間軸とは同期して進行することになる。図6は、SubPlayItem時間軸上の再生区間定義と、同期指定を示す図である。本図において第1段目は、PL時間軸を示し、第2段目はSubPlayItem時間軸を示す。図中のSubPlayItem.IN_timeは再生区間の始点を、SubPlayItem.Out_timeは再生区間の終点をそれぞれ示す。これによりSubClip時間軸上にも再生区間が定義されていることがわかる。矢印Sn1においてSync_PlayItem_Idは、PlayItemに対する同期指定を示し、矢印Sn2においてsync_start_PTS_of_PlayItemは、PL時間軸におけるPlayItem上の一時点の指定を示す。

【0020】

複数AVClipの切り換えを可能とするマルチアングル区間や、AVClip-SubClipを同期させ得る同期区間の定義を可能とするのが、BD-ROMにおけるプレイリスト情報の特徴である。以上のClip情報及びプレイリスト情報は、“静的シナリオ”に分類される。何故なら、以上のClip情報及びプレイリスト情報により、静的な再生単位であるPLが定義されるからである。以上で静的シナリオについての説明を終わる。

【0021】

続いて“動的シナリオ”について説明する。動的シナリオとは、AVClipの再生制御を動的に規定するシナリオデータである。“動的に”というのは、再生装置における状態変化やユーザからのキーイベントにより再生制御の中身が変わることをいう。BD-ROMでは、この再生制御の動作環境として2つのモードを想定している。1つ目は、DVD再生装置の動作環境と良く似た動作環境であり、コマンドベースの実行環境である。2つ目は、Java仮想マシンの動作環境である。これら2つの動作環境のうち1つ目は、HDMVモードと呼ばれる。2つ目は、BD-Jモードと呼ばれる。これら2つの動作環境があるため、動的シナリオはこのどちらかの動作環境を想定して記述される。HDMVモードを想定した動的シナリオはMovie

オブジェクトと呼ばれ、管理情報により定義される。一方BD-Jモードを想定した動的シナリオはBD-Jオブジェクトと呼ばれる。

【0022】

先ず初めにMovieオブジェクトについて説明する。

<Movieオブジェクト>

Movieオブジェクトは、“タイトル”の構成要素であり、ファイルMovieObject.bdmvに格納される。図7(a)は、Movieオブジェクトの内部構成を示す図である。Movieオブジェクトは、属性情報、複数のナビゲーションコマンドからなるコマンド列からなる。

【0023】

属性情報は、PL時間軸において、MenuCallがなされた際、MenuCall後の再生再開を意図しているか否かを示す情報(resume__intention__flag)、PL時間軸においてMenuCallをマスクするかを示す情報(menu__call__mask)、タイトルサーチをマスクするかを示す情報(title__search__flag)からなる。Movieオブジェクトは、“時間軸”+“プログラムの制御”という2つの性質を併せ持つことができるので、本編再生を実行するもの等、多様な種類のタイトルがこのMovieオブジェクトにより記述されることになる。

【0024】

ナビゲーションコマンド列は、条件分岐、再生装置における状態レジスタの設定、状態レジスタの設定値取得等を実現するコマンド列からなる。Movieオブジェクトにおいて記述可能なコマンドを以下に示す。

PlayPLコマンド

書式: PlayPL(第1引数, 第2引数)

第1引数は、プレイリストの番号で、再生すべきPLを指定することができる。第2引数は、そのPLに含まれるPlayItemや、そのPLにおける任意の時刻、Chapter、Markを用いて再生開始位置を指定することができる。

【0025】

PlayItemによりPL時間軸上の再生開始位置を指定したPlayPL関数をPlayPLatPlayItem()

ChapterによりPL時間軸上の再生開始位置を指定したPlayPL関数をPlayPLatChapter()、時刻情報によりPL時間軸上の再生開始位置を指定したPlayPL関数をPlayPLatSpecifiedTime()という。

JMPコマンド

書式: JMP 引数

JMPコマンドは、現在の動的シナリオを途中で廃棄し(discard)、引数たる分岐先動的シナリオを実行するという分岐である。JMP命令の形式には、分岐先動的シナリオを直接指定している直接参照のものと、分岐先動的シナリオを間接参照している間接参照のものがある。

Movieオブジェクトにおけるナビゲーションコマンドの記述は、DVDにおけるナビゲーションコマンドの記述方式と良く似ているので、DVD上のディスクコンテンツを、BD-ROMに移植するという作業を効率的に行うことができる。Movieオブジェクトについては、以下の国際公開公報に記載された先行技術が存在する。詳細については、本国際公開公報を参照されたい。

国際公開公報W0 2004/074976

以上でMovieオブジェクトについての説明を終える。続いてBD-Jオブジェクトについて説明する。

【0026】

<BD-Jオブジェクト>

拡張子BD-Jが付与されたファイル(00001.BD-J, 00002.BD-J, 00003.BD-J)は、BD-Jオブジェクトを構成する。BD-Jオブジェクトは、Javaプログラミング環境で記述された、BD-Jモ

10

20

30

40

50

ードの動的シナリオである。図7(b)は、BD-Jオブジェクトの内部構成を示す図である。本図に示すようにBD-Jオブジェクトは、Movieオブジェクト同様の属性情報、アプリケーション管理テーブルからなる。属性情報を有している点でBD-JオブジェクトはMovieオブジェクトとほぼ同じである。Movieオブジェクトとの違いは、BD-Jオブジェクトはコマンドが直接記述されていない点である。つまりMovieオブジェクトにおいて制御手順は、ナビゲーションコマンドにより直接記述されていた。これに対しBD-Jオブジェクトでは、そのタイトルを生存区間としているJavaアプリケーションをアプリケーション管理テーブル上に定めることにより、間接的に制御手順を規定している。このような間接的な規定により、複数タイトルにおいて制御手順を共通化するという、制御手順の共通化を効率的に行うことができる。

10

【0027】

図7(c)は、Javaアプリケーションの内部構成を示す図である。本図においてアプリケーションは、仮想マシンのヒープ領域(ワークメモリとも呼ばれる)にロードされた1つ以上のxletプログラムからなる。このワークメモリでは、1つ以上のスレッドが動作しており、ワークメモリにロードされたxletプログラム、及び、スレッドから、アプリケーションは構成されることになる。以上がアプリケーションの構成である。

【0028】

このアプリケーションの実体にあたるのが、BDMVディレクトリ配下のBDARディレクトリに格納されたJavaアーカイブファイル(00001.jar, 00002.jar)である。以降、Javaアーカイブファイルについて説明する。

20

Javaアーカイブファイル(00001.jar, 00002.jar)は、Javaアプリケーションを構成するプログラム、データを格納したアーカイブファイルである。図8(a)は、アーカイブファイルにより収められているプログラム、データを示す図である。本図におけるデータは、枠内に示すディレクトリ構造が配置された複数ファイルを、javaアーカイバでまとめたものである。枠内に示すディレクトリ構造は、rootディレクトリ、javaディレクトリ、imageディレクトリとからなり、rootディにcommon.pkgが、javaディレクトリにaaa.class, bb.classが、imageディレクトリに、menu.jpgが配置されている。javaアーカイブファイルは、これらをjavaアーカイバでまとめることで得られる。かかるデータは、BD-ROMからキャッシュに読み出されるにあたって展開され、キャッシュ上で、ディレクトリに配置された複数ファイルとして取り扱われる。Javaアーカイブファイルのファイル名における“xxxxx”という5桁の数値は、アプリケーションのID(applicationID)を示す。本Javaアーカイブファイルがキャッシュに読み出された際、このファイル名における数値を参照することにより、任意のJavaアプリケーションを構成するプログラム、データを取り出すことができる。

30

【0029】

Javaアーカイブファイルにおいて1つにまとめられるファイルには、xletプログラムがある。

xletプログラムは、JMF(Java Media Framework)インターフェイスを利用することができるJavaプログラムである。xletプログラムは、キーイベントを受信するEventListener等、複数の関数からなり、JMF等の方式に従って、受信したキーイベントに基づく処理を行う。

40

【0030】

図8(b)は、xletプログラムの一例を示す図である。JMF A“BD://00001.mpls”;は、PLを再生するプレーヤインスタンスの生成をJava仮想マシンに命じるメソッドである。A.playは、JMFプレーヤインスタンスに再生を命じるメソッドである。かかるJMFプレーヤインスタンス生成は、JMFライブラリに基づきなされる。xletプログラムの記述は、BD-ROMのPLに限らず、時間軸をもったコンテンツ全般に適用可能なJMFの記述である。このような記述が可能であるので、Javaプログラミングに長けたソフトハウスに、BD-Jオブジェクト作成を促すことができる。

【0031】

50

図8(b)におけるJumpTitle();は、ファンクションAPIのコールである。このファンクションAPIは、他のタイトルへの分岐(図中ではtitle#1)を再生装置に命じるものである。ここでファンクションAPIとは、BD-ROM再生装置により供給されるAPI(Application Interface)である。JumpTitleコマンドの他にも、ファンクションAPIのコールにより、BD-ROM再生装置特有の処理をxletプログラムに記述することができる。

【0032】

BD-JモードにおいてPL再生は、JMFインターフェイスにより規定される。このJMFプレイヤーインスタンスは、PL時間軸を定めるものだから、タイトル時間軸は、このJMFプレイヤーインスタンスをもったタイトルから定まる。また

BD-Jモードにおいてタイトルからタイトルへの分岐はJumpTitleAPIのコールにより規定される。JumpTitleAPIコールは、いわばタイトルの終了時点を決めるものなので、こうしたJMFプレイヤーインスタンス、JumpTitleAPIコールをもったアプリケーションが、BD-Jモードにおいてタイトルの開始及び終了を律することになる。かかるアプリケーションを本編再生アプリケーションという。

【0033】

以上が、BD-Jモードにおける動的シナリオについての説明である。このBD-Jモードにおける動的シナリオにより、PL再生と、プログラムの制御とを併せもったタイトルが定義されることになる。尚、本実施形態においてアプリケーションを構成するプログラム、データは、Javaアーカイブファイルにまとめられたが、LZHファイル、zipファイルであってもよい。

【0034】

<タイトル時間軸>

タイトルを構成する静的シナリオ、動的シナリオについて説明を終えたところで、これらによりどのような時間軸が定義されるかについて説明する。タイトルにより定義される時間軸は、“タイトル時間軸”と呼ばれる。タイトル時間軸とは、Movieオブジェクト、又は、BD-Jオブジェクトにより再生が命じられるPLにより構成される。ここで一例を挙げるのは、図9(a)のようなタイトルである。このタイトルは、トップメニュー→title#1→title#2→トップメニュー、トップメニュー→title#3→トップメニューという一連のタイトルである。かかるタイトルのうち、title#1はPlayList#1、PlayList#2、title#2がPlayList#3、title#3がPlayList#4の再生を命じるものなら、図9(b)のように、PlayList#1、PlayList#2の時間軸を足し合わせた時間軸を、title#1はもつことになる。同様にtitle#2は、PlayList#3時間軸からなる時間軸を、title#3はPlayList#4時間軸からなる時間軸を持つことになる。これらタイトル時間軸におけるPL時間軸ではシームレス再生が保証されるが、タイトル時間軸間ではシームレス再生の保証は必要でなくなる。Javaアプリケーションを動作させるにあたっては、Javaアプリケーションを、仮想マシンのワークメモリ上に存在させてもよい期間(サービス期間)を、こうしたタイトル時間軸上に定義せねばならない。BD-JモードにおいてJavaアプリケーションを動作させるにあたっては、互いに分岐し合う時間軸上に、Javaアプリケーションのサービス期間を定義せねばならない。このサービス期間の定義が、BD-ROM向けのプログラミングを行うにあたっての留意点になる。

【0035】

最後に、index.bdmvに格納されたIndexTableについて説明する。IndexTableは、タイトル番号と、Movieオブジェクト、BD-Jオブジェクトとを対応づけるテーブルであり、動的シナリオから動的シナリオへの分岐の際、参照される間接参照用テーブルである。IndexTableは、複数ラベルのそれぞれに対するIndexからなる。各Indexには、そのラベルに対応する動的シナリオの識別子が記述されている。こうしたIndexTableを参照することで、Movieオブジェクト、BD-Jオブジェクトの違いを厳密に区別することなく、分岐を実現することができる。IndexTableについては、以下の国際公開公報に詳細が記載されている。詳細については、本公報を参照されたい。

10

20

30

40

50

国際公開公報W0 2004/025651 A1公報

以上がBD-ROMに記録されているファイルについて説明である。

【0036】

＜アプリケーション管理テーブル＞

JMFプレーヤインスタンス、JumpTitleAPIコールをもったアプリケーションが、タイトル時間軸を律することは上述した通りだが、JMFプレーヤインスタンスやJumpTitleAPIのコールをもたないその他のアプリケーションを、タイトル時間軸上で動作させる場合、時間軸の何処からアプリケーションによるサービスを開始し、時間軸の何処でアプリケーションによるサービスを終えるかという“サービスの開始点・終了点”を明確に規定することが重要になる。本実施形態では、アプリケーションによるサービスが開始してから、終了するまでを、“アプリケーションの生存”として定義する。アプリケーションの生存を定義するための情報は、BD-Jオブジェクトにおけるアプリケーション管理テーブルに存在する。以降アプリケーション管理テーブルについてより詳しく説明する。

【0037】

アプリケーション管理テーブル(AMT)は、各タイトルが有しているタイトル時間軸において、仮想マシンのワークメモリ上で生存し得るアプリケーションを示す情報である。ワークメモリにおける生存とは、そのアプリケーションを構成するxletプログラムが、ワークメモリに読み出され、仮想マシンによる実行が可能になっている状態をいう。図7(b)における破線矢印at1は、アプリケーション管理テーブルの内部構成をクローズアップして示す。この内部構成に示すように、アプリケーション管理テーブルは、『生存区間』と、そのタイトルを生存区間としているアプリケーションを示す『applicationID』と、そのアプリケーションの『起動属性』とからなる。

【0038】

近い将来、実施されるであろうディスクコンテンツを題材に選んで、アプリケーション管理テーブルにおける生存区間記述について、具体例を交えて説明する。ここで題材にするディスクコンテンツは、映像本編を構成する本編タイトル(title#1)、オンラインショッピングを構成するオンラインショッピングタイトル(title#2)、ゲームアプリケーションを構成するゲームタイトル(title#3)という、性格が異なる3つのタイトルを含むものである。図10は、本編タイトル、オンラインショッピングタイトル、ゲームタイトルという3つのタイトルを含むディスクコンテンツを示す図である。本図における右側にはIndexTableを記述しており、左側には3つのタイトルを記述している。

【0039】

右側における破線枠は、各アプリケーションがどのタイトルに属しているかという帰属関係を示す。3つのタイトルのうちtitle#1は、application#1、application#2、application#3という3つのアプリケーションからなる。title#2は、application#3、application#4という2つのアプリケーション、title#3は、application#5を含む。図11は、図10に示した3つのタイトルの再生画像の一例を示す図である。これら3つのタイトルの再生画像において、図11(a)(b)の本編タイトル、オンラインショッピングタイトルには、ショッピングカートを模した映像(カートcr1)1が存在するが、図11(c)のゲームタイトルには、カート映像が存在しない。カートcr1は、本編タイトル、オンラインショッピングタイトルにおいて共通して表示しておく必要があるので、カートプログラムたるapplication#3を、title#1、title#2の双方で起動するようにしている。このように複数タイトルで起動するようなアプリケーションには、上述したカートアプリの他に、映画作品に登場するマスコットを模したエージェントアプリ、メニューコール操作に応じてメニュー表示を行うメニューアプリがある。

【0040】

図10の破線に示される帰属関係から各アプリケーションの生存区間をグラフ化すると、図12(a)のようになる。本図において横軸は、タイトル時間軸であり、縦軸方向に各アプリケーションの生存区間を配置している。ここでapplication#1、application#2

は、title#1のみに帰属しているので、これらの生存区間は、title#1内に留まっている。application#4は、title#2のみに帰属しているので、これらの生存区間は、title#2内に留まっている。application#5は、title#3のみに帰属しているので、これらの生存区間は、title#3内に留まっている。application#3は、title#1及びtitle#2に帰属しているので、これらの生存区間は、title#1-title#2にわたる。この生存区間に基づき、アプリケーション管理テーブルを記述すると、title#1, #2, #3のアプリケーション管理テーブルは図12(b)のようになる。このようにアプリケーション管理テーブルが記述されれば、title#1の再生開始時においてapplication#1、application#2、application#3をワークメモリにロードしておく。そしてtitle#2の開始時にapplication#1、application#2をワークメモリから削除してapplication#3のみにするという制御を行う。これと同様にtitle#2の再生開始時においてapplication#4をワークメモリにロードしておき、title#3の開始時にapplication#3, #4をワークメモリから削除するという制御を行う。

【0041】

更に、title#3の再生中においてapplication#5をワークメモリにロードしておき、title#3の再生終了時にapplication#5をワークメモリから削除するという制御を行う。

タイトル間分岐があった場合でも、分岐元-分岐先において生存しているアプリケーションはワークメモリ上に格納しておき、分岐元ではなく、分岐先にのみ存在するアプリケーションをワークメモリに読み込めば良いから、アプリケーションをワークメモリに読み込む回数は必要最低数になる。このように、読込回数を少なくすることにより、タイトルの境界を意識させないアプリケーション、つまりアンバウンダリなアプリケーションを実現することができる。

【0042】

続いてアプリケーションの起動属性について説明する。起動属性には、自動的な起動を示す「AutoRun」、自動起動の対象ではないが、仮想マシンのワークメモリに置いて良いことを示す「Persistent」、仮想マシンのワークメモリにはおかれるが、CPUパワーの割り当ては不可となる「Suspend」がある。

「AutoRun」は、対応するタイトルの分岐と同時に、そのアプリケーションをワークメモリに読み込み、且つ実行する旨を示す生存区間である。あるタイトルから、別のタイトルへの分岐があると、アプリケーション管理を行う管理主体(アプリケーションマネージャ)は、その分岐先タイトルにおいて生存しており、かつ起動属性がAutoRunに設定されたアプリケーションを仮想マシンのワークメモリに読み込み実行する。これによりそのアプリケーションは、タイトル分岐と共に自動的に起動されることになる。起動属性をAutoRunに設定しておくアプリケーションとしては、JMFプレーヤインスタンス及びJumpTitleAPIコールをもつようなアプリケーションが挙げられる。何故なら、このようなアプリケーションは、タイトル時間軸を律する側のアプリケーションであり、このようなアプリケーションを自動的に起動にしないと、タイトル時間軸の概念が曖昧になってしまうからである。

【0043】

起動属性「Persistent」は、継続属性であり、分岐元titleにおけるアプリケーションの状態を継続することを示す。またワークメモリにロードしてよいことを示す属性である。起動属性が「Persistent」である場合、この起動属性が付与されたアプリケーションは、他のアプリケーションからの呼び出しが許可されることになる。アプリケーション管理を行う管理主体(アプリケーションマネージャ)は、起動中のアプリケーションから呼出があると、そのアプリケーションのapplicationIDが、アプリケーション管理テーブルに記述されていて、起動属性が「Persistent」であるか否かを判定する。「Persistent」であれば、そのアプリケーションをワークメモリにロードする。一方、その呼出先アプリケーションのapplicationIDがアプリケーション管理テーブルに記述されていない場合、そのアプリケーションはワークメモリにロードされない。アプリケーションによる呼出は、こ

の「Persistent」が付与されたアプリケーションに限られることになる。

【0044】

「Persistent」は、起動属性を明示的に指定しない場合に付与されるデフォルトの起動属性であるから、あるアプリケーションの起動属性が無指定「ー」である場合、そのアプリケーションの起動属性の起動属性はこのPersistentであることを意味する。

これらの起動属性が、図11のアプリケーションにおいてどのように記述されているかについて説明する。図13は、図12の3つのアプリケーションに対する起動属性の設定例である。図12に示した3つのアプリケーションのうちapplication#2は、図13(b)に示すように他のアプリケーションからのアプリケーション呼出があつて初めて起動するアプリケーションであるとする。残りのapplication#1、application#3は、title#1の開始と同時に自動的に起動されるアプリケーションであるとする。この場合、図13(a)に示すように、アプリケーション管理テーブルにおける各アプリケーションの起動属性を、application#1、application#3は「AutoRun」、application#2は、「Persistent」と設定しておく。この場合、application#1、application#3は、title#1への分岐時において自動的にワークメモリにロードされ、実行されることになる。一方application#2は、起動属性がPersistentなので、「application#2は仮想マシンのワークメモリ上にロードしてよいアプリケーション」であるとの消極的な意味に解される。故に、application#2は、application#1からの呼出があつて初めて仮想マシンのワークメモリにロードされ、実行されることになる。以上の生存区間・起動属性により、仮想マシン上で動作し得るアプリケーションの数を4個以下に制限し、総スレッド数を64個以下に制限することが可能なので、アプリケーションの安定動作を保証することができる。

【0045】

続いてSuspendについて説明する。

Suspendとは、リソースは割り付けられているが、CPUパワーは割り当てられない状態にアプリケーションが置かれることをいう。かかるSuspendは、例えばゲームタイトルの実行中に、サイドパスを経由するという処理の実現に有意義である。図14(a)(b)はSuspendが有意義となる事例を示す図である。図14(b)に示すように、3つのタイトル(title#1、title#2、title#3)があり、そのうちtitle#1、title#3はゲームアプリを実行するが、途中のtitle#2はサイドパスであり、映像再生を実現するものである。サイドパスでは、映像再生を実現する必要があるため、ゲームの実行を中断させることになる。ゲームアプリでは途中のスコア等が計数されているため、リソースの格納値はtitle#2の前後で維持したい。この場合、title#2の開始時点でゲームアプリをSuspendし、title#3の開始時点でapplication#2をレジュームするというようにアプリケーション管理テーブルを記述する。こうすることでtitle#2においてapplication#2は、リソースは割り付けられているので、リソースの格納値は維持される。しかし、CPUパワーは割り当てられない状態なので仮想マシンによりapplication#2は実行されることはない。これにより、ゲームタイトルの実行中に、サイドパスを実行するという処理が実現される。

【0046】

図15は、起動属性がとり得る三態様(Persistent、AutoRun、Suspend)と、直前タイトルにおけるアプリケーション状態の三態様(非起動、起動中、Suspend)とがとりうる組合せを示す図である。直前状態が“非起動”である場合、起動属性が“AutoRun”であるなら、分岐先タイトルにおいてそのアプリケーションは、起動されることになる。

直前状態が“非起動”であり、起動属性が“Persistent”、“Suspend”であるなら、分岐先タイトルにおいてそのアプリケーションは、何ももせず、状態を継続することになる。

【0047】

直前状態が“起動中”である場合、起動属性が“Persistent”、“AutoRun”であるなら、分岐先タイトルにおいてそのアプリケーションは、何ももせず、状態を継続することになる。

起動属性が“Suspend”であるなら、アプリケーションの状態はSuspendされることになる。直前状態が“Suspend”である場合、分岐先タイトルの起動属性が“Suspend”ならSuspendを維持することになる。“Persistent”、“AutoRun”であるなら、分岐先タイトルにおいて

そのアプリケーションは、レジュームすることになる。アプリケーション管理テーブルにおいて生存区間及び起動属性を定義することにより、タイトル時間軸の進行に沿って、Javaアプリケーションを動作させるという同期制御が可能になり、映像再生と、プログラム実行とを伴った、様々なアプリケーションを世に送り出すことができる。以上が記録媒体についての説明である。続いて本発明に係る再生装置について説明する。

【0048】

図16は、本発明に係る再生装置の内部構成を示す図である。本発明に係る再生装置は、本図に示す内部に基づき、工業的に生産される。本発明に係る再生装置は、主としてシステムLSIと、ドライブ装置という2つのパーツからなり、これらのパーツを装置のキャビネット及び基板に実装することで工業的に生産することができる。システムLSIは、再生装置の機能を果たす様々な処理部を集積した集積回路である。こうして生産される再生装置は、BD-ROMドライブ1、リードバッファ2、デマルチプレクサ3、ビデオデコーダ4、ビデオプレーン5、P-Graphicsデコーダ9、Presentation Graphicsプレーン10、合成部11、フォントゼネレータ12、I-Graphicsデコーダ13、スイッチ14、Interactive Graphicsプレーン15、合成部16、HDD17、リードバッファ18、デマルチプレクサ19、オーディオデコーダ20、シナリオメモリ21、CPU22、キーイベント処理部23、命令ROM24、スイッチ25、CLUT部26、CLUT部27、PSRセット28、ローカルメモリ29から構成される。

【0049】

BD-ROMドライブ1は、BD-ROMのローディング／イジェクトを行い、BD-ROMに対するアクセスを実行する。

リードバッファ2は、FIFOメモリであり、BD-ROMから読み出されたTSパケットが先入れ先出し式に格納される。

デマルチプレクサ(De-MUX)3は、リードバッファ2からTSパケットを取り出して、このTSパケットを構成するTSパケットをPESパケットに変換する。そして変換により得られたPESパケットのうち、CPU22から設定されたPIDをもつものをビデオデコーダ4、オーディオデコーダ20、P-Graphicsデコーダ9、I-Graphicsデコーダ13のどれかに出力する。

【0050】

ビデオデコーダ4は、デマルチプレクサ3から出力された複数PESパケットを復号して非圧縮形式のピクチャを得てビデオプレーン5に書き込む。

ビデオプレーン5は、非圧縮形式のピクチャを格納しておくためのプレーンである。プレーンとは、再生装置において一画面分の画素データを格納しておくためのメモリ領域である。再生装置に複数のプレーンを設けておき、これらプレーンの格納内容を画素毎に加算して、映像出力を行えば、複数の映像内容を合成させた上で映像出力を行うことができる。ビデオプレーン5における解像度は1920×1080であり、このビデオプレーン5に格納されたピクチャデータは、16ビットのYUV値で表現された画素データにより構成される。

【0051】

P-Graphicsデコーダ9は、BD-ROM、HDD17から読み出されたプレゼンテーショングラフィックスストリームをデコードして、非圧縮グラフィックスをPresentation Graphicsプレーン10に書き込む。グラフィックスストリームのデコードにより、字幕が画面上に現れることになる。

Presentation Graphicsプレーン10は、一画面分の領域をもったメモリであり、一画面分の非圧縮グラフィックスを格納することができる。本プレーンにおける解像度は1920×1080であり、Presentation Graphicsプレーン10中の非圧縮グラフィックスの各画素は8ビットのインデックスカラーで表現される。CLUT(Color Lookup Table)を用いてかかるインデックスカラーを変換することにより、Presentation Graphicsプレーン10に格納された非圧縮グラフィックスは、表示に供される。

【0052】

合成部11は、非圧縮状態のピクチャデータ(i)を、Presentation Graphicsプレーン10の格納内容と合成する。

10

20

30

40

50

フォントゼネレータ12は、文字フォントを用いてtextSTストリームに含まれるテキストコードをビットマップに展開する。

I-Graphicsデコーダ13は、BD-ROM又はHDD17から読み出されたインタラクティブグラフィクスストリームをデコードして、非圧縮グラフィクスをInteractive Graphicsプレーン15に書き込む。

【0053】

スイッチ14は、フォントゼネレータ12が生成したフォント列、P-Graphicsデコーダ9のデコードにより得られたグラフィクスの何れかを選択的にPresentation Graphicsプレーン10に書き込むスイッチである。

Interactive Graphicsプレーン15は、I-Graphicsデコーダ13によるデコードで得られた非圧縮グラフィクスが書き込まれる。

【0054】

合成部16は、Interactive Graphicsプレーン10の格納内容と、合成部8の出力である合成画像(非圧縮状態のピクチャデータと、Presentation Graphicsプレーン7の格納内容とを合成したもの)とを合成する。

HDD17は、ネットワーク等を介してダウンロードされたSubClip、Clip情報、プレイリスト情報が格納される内蔵媒体である。このHDD17中のプレイリスト情報はBD-ROM及びHDD17のどちらに存在するClip情報であっても、指定できる点で異なる。この指定にあたって、HDD17上のプレイリスト情報は、BD-ROM上のファイルをフルパスで指定する必要はない。本HDD17は、BD-ROMと一体になって、仮想的な1つのドライブ(バーチャルパッケージと呼ばれる)として、再生装置により認識されるからである。故に、PlayItem情報におけるClip_Information_file_name及びSubPlayItem情報のClip_Information_file_nameは、Clip情報の格納したファイルのファイルボデイにあたる5桁の数値を指定することにより、HDD17、BD-ROM上のAVClipを指定することができる。このHDDの記録内容を読み出し、BD-ROMの記録内容と動的に組み合わせることにより、様々な再生のバリエーションを産み出すことができる。

【0055】

リードバッファ18は、FIFOメモリであり、HDD17から読み出されたTSパケットが先入れ先出し式に格納される。

デマルチプレクサ(De-MUX)19は、リードバッファ18からTSパケットを取り出して、TSパケットをPESパケットに変換する。そして変換により得られたPESパケットのうち、所望のstreamPIDをもつものをフォントゼネレータ12に出力する。

【0056】

オーディオデコーダ20は、デマルチプレクサ19から出力されたPESパケットを復号して、非圧縮形式のオーディオデータを出力する。

シナリオメモリ21は、カレントのPL情報やカレントのClip情報を格納しておくためのメモリである。カレントPL情報とは、BD-ROMに記録されている複数PL情報のうち、現在処理対象になっているものをいう。カレントClip情報とは、BD-ROMに記録されている複数Clip情報のうち、現在処理対象になっているものをいう。

【0057】

CPU22は、命令ROM24に格納されているソフトウェアを実行して、再生装置全体の制御を実行する。

キーイベント処理部23は、リモコンや再生装置のフロントパネルに対するキー操作に応じて、その操作を行うキーイベントを出力する。

命令ROM24は、再生装置の制御を規定するソフトウェアを記憶している。

【0058】

スイッチ25は、BD-ROM及びHDD17から読み出された各種データを、リードバッファ2、リードバッファ18、シナリオメモリ21、ローカルメモリ29のどれかに選択的に投入するスイッチである。

CLUT部26は、ビデオプレーン5に格納された非圧縮グラフィクスにおけるインデック

10

20

30

40

50

スカラーを、Y, Cr, Cb値に変換する。

【0059】

CLUT部27は、Interactive Graphicsプレーン15に格納された非圧縮グラフィクスにおけるインデックスカラーを、Y, Cr, Cb値に変換する。

PSRセット28は、再生装置に内蔵されるレジスタであり、64個のPlayer Status Register (PSR)と、4096個のGeneral Purpose Register (GPR)とからなる。Player Status Registerの設定値(PSR)のうち、PSR4~PSR8は、現在の再生時点を表現するのに用いられる。

【0060】

PSR4は、1~100の値に設定されることで、現在の再生時点が属するタイトルを示し、0に設定されることで、現在の再生時点がトップメニューであることを示す。

PSR5は、1~999の値に設定されることで、現在の再生時点が属するチャプター番号を示し、0xFFFFに設定されることで、再生装置においてチャプター番号が無効であることを示す。

【0061】

PSR6は、0~999の値に設定されることで、現在の再生時点が属するPL(カレントPL)の番号を示す。

PSR7は、0~255の値に設定されることで、現在の再生時点が属するPlay Item(カレントPlay Item)の番号を示す。

PSR8は、0~0xFFFFFFFFの値に設定されることで、45KHzの時間精度を用いて現在の再生時点(カレントPTM(Presentation Time))を示す。以上のPSR4~PSR8により、現在の再生時点が特定されることになる。

【0062】

ローカルメモリ29は、BD-ROMからの読み出しは低速である故、BD-ROMの記録内容を一時的に格納しておくためのキャッシュメモリである。かかるローカルメモリ29が存在することにより、BD-Jモードにおけるアプリケーション実行は、効率化されることになる。図17(a)は、BD-ROMに存在しているJavaアーカイブファイルを、ローカルメモリ29上でどのように識別するかを示す図である。図17(a)の表は、左欄にBD-ROM上のファイル名を、右欄にローカルメモリ29上のファイル名をそれぞれ示している。これら右欄、左欄を比較すれば、ローカルメモリ29におけるファイルは、ディレクトリ指定“BDJA”を省いたファイルパスで指定されていることがわかる。

【0063】

図17(b)は、図17(a)の応用を示す図である。本応用例は、ヘッダ+データという形式で、ファイルに格納されているデータを格納するというものである。何をヘッダに用いるかという、ローカルメモリ29におけるファイルパスを用いる。図17(b)に示したように、ローカルメモリ29ではBD-ROMにおけるファイルパスの一部を省略したものをファイルパスに用いるから、当該ファイルパスをヘッダに格納することで、各データにおけるBD-ROM上の所在を明らかにすることができる。

【0064】

以上が、本実施形態に係る再生装置のハードウェア構成である。続いて本実施形態に係る再生装置のソフトウェア構成について説明する。

図18は、ROM24に格納されたソフトウェアと、ハードウェアとからなる部分を、レイア構成に置き換えて描いた図である。本図に示すように、再生装置のレイア構成は、以下のa), b), c), d-1), d-2), e), f)からなる。つまり、

a)物理的なハードウェア階層の上に、

b)AVClipによる再生を制御するPresentation Engine 31、

c)プレイリスト情報及びClip情報に基づく再生制御を行うPlayback Control Engine 3

2、

という2つの階層があり、

最上位の階層に

e)タイトル間の分岐を実行するモジュールマネージャ34がある。

【0065】

これらHDMVモジュール33、モジュールマネージャ34の間に、

d-1)Movieオブジェクトの解読・実行主体であるHDMVモジュール33と、

d-2)BD-Jオブジェクトの解読・実行を行うBD-Jモジュール35とが同じ階層に置かれている。

BD-Jモジュール35は、いわゆるJavaプラットフォームであり、ワークメモリ37を含むJava仮想マシン38を中核にした構成になっていて、アプリケーションマネージャ36、Event Listener Manager39、Default Operation Manager40から構成される。先ず初めに、Presentation Engine31～モジュールマネージャ34について説明する。図19は、Presentation Engine31～モジュールマネージャ34による処理を模式化した図である。

10

【0066】

Presentation Engine31は、AV再生機能を実行する。再生装置のAV再生機能とは、DVDプレーヤ、CDプレーヤから踏襲した伝統的な機能群であり、再生開始(Play)、再生停止(Stop)、一時停止(Pause On)、一時停止の解除(Pause Off)、Still機能の解除(still off)、速度指定付きの早送り(Forward Play(speed))、速度指定付きの巻戻し(Backward Play(speed))、音声切り換え(Audio Change)、副映像切り換え(Subtitle Change)、アングル切り換え(Angle Change)といった機能である。AV再生機能を実現するべく、Presentation Engine31は、リードバッファ2上に読み出されたAVClipのうち、所望に時刻にあたる部分のデコードを行うよう、ビデオデコーダ4、P-Graphicsデコーダ9、I-Graphicsデコーダ13、オーディオデコーダ20を制御する。所望の時刻としてPSR8(カレントPTM)に示される箇所のデコードを行わせることにより、AVClipにおいて、任意の時点の再生を可能することができる。図中の1は、Presentation Engine31によるデコード開始を模式化して示す。

20

【0067】

再生制御エンジン(Playback Control Engine(PCE))32は、プレイリストの再生機能(i)、再生装置における状態取得/設定機能(ii)といった諸機能を実行する。PLの再生機能とは、Presentation Engine31が行うAV再生機能のうち、再生開始や再生停止を、カレントPL情報及びClip情報に従って行わせることをいう。これら機能(i)～(ii)は、HDMVモジュール33～BD-Jモジュール35からのファンクションコールに応じて実行する。つまり再生制御エンジン32は、ユーザ操作による指示、レイヤモデルにおける上位層からの指示に応じて、自身の機能を実行する。図19において、2,3が付された矢印は、Clip情報及びプレイリスト情報に対するPlayback Control Engine32の参照を模式的に示す。

30

【0068】

HDMVモジュール33は、MOVIEモードの実行主体であり、モジュールマネージャ34から分岐先を構成するMovieオブジェクトが通知されれば、分岐先タイトルを構成するMovieオブジェクトをローカルメモリ29に読み出して、このMovieオブジェクトに記述されたナビゲーションコマンドを解読し、解読結果に基づきPlayback Control Engine32に対するファンクションコールを実行する。図19において▽2,▽3,▽4が付された矢印は、モジュールマネージャ34からの分岐先Movieオブジェクトの通知(2)、Movieオブジェクトに記述されたナビゲーションコマンドの解読(3)、Playback Control Engine32に対するファンクションコール(4)を、模式的に示している。

40

【0069】

モジュールマネージャ34は、BD-ROMから読み出されたIndex Tableを保持して、分岐制御を行う。この分岐制御は、JumpTitleコマンドをHDMVモジュール33が実行した場合、又は、タイトルジャンプAPIがBD-Jモジュール35からコールされた場合、そのジャンプ先となるタイトル番号を受け取って、そのタイトルを構成するMovieオブジェクト又はBD-JオブジェクトをHDMVモジュール33又はBD-Jモジュール35に通知するというものである。図中の▽0,▽1,▽2が付された矢印は、JumpTitleコマンドの実行(0)、モジュールマネージャ34によるIndexTable参照(1)、分岐先Movieオブジェクト(2)の通知を模式的

50

に示している。

【0070】

以上がPresentation Engine 3 1～モジュールマネージャ 3 4についての説明である。続いてアプリケーションマネージャ 3 6について、図 2 0を参照しながら説明する。図 2 0は、アプリケーションマネージャ 3 6を示す図である。

アプリケーションマネージャ 3 6は、アプリケーション管理テーブルを参照したアプリケーションの起動制御、タイトルの正常終了時における制御を実行する。

【0071】

起動制御とは、モジュールマネージャ 3 4から分岐先となるBD-Jオブジェクトが通知される度に、そのBD-Jオブジェクトを読み出し、そのBD-Jオブジェクト内のアプリケーション管理テーブルを参照してローカルメモリ 2 9アクセスを行う。そして現在の再生時点を生存区間とするアプリケーションを構成するxletプログラムを、ワークメモリに読み出すという制御である。図 2 0における☆1、☆2、☆3は、起動制御における分岐先BD-Jオブジェクトの通知(1)、アプリケーション管理テーブル参照(2)、Java仮想マシン 3 8に対する起動指示を模式化して示す。この起動指示によりJava仮想マシン 3 8は、ローカルメモリ 2 9からワークメモリ 3 7にxletプログラムを読み出す(☆5)。

【0072】

タイトルの終了制御には、正常終了時の制御と、異常終了時の制御とがある。正常終了時の制御には、タイトルを構成するアプリケーションによりジャンプタイトルAPIがコールされて、分岐先タイトルへの切り換えを分岐制御の主体(モジュールマネージャ 3 4)に要求するという制御がある。この終了制御における、モジュールマネージャ 3 4通知を模式化して示したのが矢印☆6である。ここでタイトルを正常終了するにあたって、タイトルを構成するアプリケーションは、起動されたままであってもよい。何故なら、アプリケーションを終了するか否かは、分岐先タイトルにおいて判断するからである。本実施形態では深く触れないが、アプリケーションマネージャ 3 6は、BD-ROMからローカルメモリ 2 9にJavaアーカイブファイルを読み出す(8)との処理を行う。このローカルメモリ 2 9への読み出しを模式化したのが☆8である。

【0073】

以上がアプリケーションマネージャ 3 6についての説明である。続いてワークメモリ 3 7～Default Operation Manager 4 0について、図 2 1を参照しながら説明する。

ワークメモリ 3 7は、アプリケーションを構成するxletプログラムが配置されるヒープ領域である。ワークメモリ 3 7は、本来Java仮想マシン 3 8内に存在するが、図 2 1では、作図の便宜上、ワークメモリ 3 7をJava仮想マシン 3 8上位層に記述している。ワークメモリ 3 7上のxletプログラムには、EventListenerや、JMFプレーヤインスタンスが含まれる。

【0074】

Java仮想マシン 3 8は、アプリケーションを構成するxletプログラムをワークメモリ 3 7にロードして、xletプログラムを解読し、解読結果に従った処理を実行する。上述したようにxletプログラムは、JMFプレーヤインスタンス生成を命じるメソッド、このJMFプレーヤインスタンスの実行を命じるメソッドを含むので、これらのメソッドで命じられた処理内容を実現するよう、下位層に対する制御を行う。JMFプレーヤインスタンス生成が命じられれば、Java仮想マシン 3 8は、BD-ROM上のYYYY.MPLSファイルに関連付けられたJMFプレーヤインスタンスを得る。また、JMFプレーヤインスタンスにおけるJMFメソッドの実行が命じられれば、このJMFメソッドをBDミドルウェアに発行して、BD再生装置が対応しているファンクションコールに置き換させる。そして置換後のファンクションコールをPlayback Control Engine 3 2に発行する。

【0075】

Event Listner Manager 3 9は、ユーザ操作により生じたイベント(キーイベント)を解析し、イベントの振り分けを行う。図中の実線矢印◇1、◇2は、このEvent Listner Manager 3 9による振り分けを模式的に示す。START、STOP、SPEED等、xletプログラム内のEven

10

20

30

40

50

t Listnerに登録されたキーイベントなら、BD-Jオブジェクトにより間接参照されているxletプログラムにかかるイベントを振り分ける。START、STOP、SPEEDは、JMFに対応したイベントであり、xletプログラムのEvent Listnerには、これらのキーイベントが登録されているので、本キーイベントによりxletプログラムの起動が可能になる。キーイベントがEvent Listner非登録のキーイベントである場合、本キーイベントをDefault Operation Manager 40に振り分ける。音声切り換え、アングル切り換え等、BD-ROM再生装置において生じるキーイベントには、Event Listnerに登録されていない多様なものがあり、これらのキーイベントが生じたとしても、漏れの無い処理を実行するためである。

【0076】

Default Operation Manager 40は、xletプログラム内のEvent Listnerに登録されていないキーイベントがEvent Listner Manager 39から振り分けられると、そのEvent Listner非登録イベントに対応するファンクションコールをPlayback Control Engine 32に対して実行する。このDefault Operation Manager 40によるファンクションコールを模式的に示したのが、図中の矢印◇3である。尚、図21においてEvent Listner非登録イベントはEvent Listner Manager 39、Default Operation Manager 40により振り分けられたが、Playback Control Engine 32がダイレクトにEvent Listner非登録イベントを受け取り、再生制御を行ってもよい(図中の◇4)。

【0077】

(フローチャートの説明)

以上のアプリケーションマネージャ36についての説明は、その概要に触れたに過ぎない。アプリケーションマネージャ36の処理を更に詳しく示したのが図22、図23のフローチャートである。以降、これらのフローチャートを参照してアプリケーションマネージャ36の処理手順についてより詳しく説明する。

【0078】

図22は、アプリケーションマネージャ36による分岐時の制御手順を示す図である。本フローチャートは、ステップS2～ステップS5がなす条件を満たすアプリケーション(アプリケーションxという)を、起動又は終了させるという処理である。

ステップS2は、分岐元タイトルで非起動だが、分岐先タイトルで生存していて、分岐先タイトルにおける起動属性がAutoRun属性のアプリケーションxが存在するか否かの判定であり、もしあれば、ローカルメモリ29に対するキャッシュセンスを行う。キャッシュセンスの結果、アプリケーションxがローカルメモリ29上に有れば(ステップS7でYes)、ローカルメモリ29からワークメモリ37にアプリケーションxを読み込む(ステップS8)。ローカルメモリ29に無ければ、BD-ROMからローカルメモリ29にアプリケーションxを読み込んだ上で、ローカルメモリ29からワークメモリ37にアプリケーションxを読み込む(ステップS9)。

【0079】

ステップS3は、分岐元タイトルで起動中で、分岐先タイトルで非生存のアプリケーションxが存在するかどうかの判定である。もし存在するのなら、アプリケーションxをワークメモリ37から削除して終了させる(ステップS10)。

ステップS4は、分岐元Suspend、分岐先AutoRun又はPersistentのアプリケーションが存在するか否かの判定である。もし存在するのなら、アプリケーションxをResumeする(ステップS11)。

【0080】

ステップS5は、分岐元タイトルで起動中で、分岐先Suspendのアプリケーションが存在するか否かの判定である。もし存在すれば、アプリケーションxをSuspendする(ステップS12)。

個々のアプリケーションを終了させるにあたってのアプリケーションマネージャ36の処理は、図23に示すものとなる。図23は、アプリケーション終了処理の処理手順を示すフローチャートである。本図は、終了すべき複数アプリケーションのそれぞれについて

、ステップS 1 6～ステップS 2 0の処理を繰り返すループ処理になっている(ステップS 1 5)。本ループ処理においてアプリケーションマネージャ3 6は起動中アプリケーションを終了するようなterminateイベントを発行し(ステップS 1 6)、タイマセットして(ステップS 1 7)、ステップS 1 8～ステップS 2 0からなるループ処理に移行する。このterminateイベントをEvent Listenerが受信すれば、対応するxletプログラムは、終了プロセスを起動する。終了プロセスが終了すれば、そのxletプログラムはワークメモリ3 7から解放され、終了することになる。

【0081】

ステップS 1 8～ステップS 2 0のループ処理の継続中、タイマはカウントダウンを継続する。本ループ処理においてステップS 1 8は、発行先アプリケーションが終了したか否かの判定であり、もし終了していればこのアプリケーションに対する処理を終える。ステップS 1 9は、タイマがタイムアウトしたか否かの判定であり、タイムアウトすれば、ステップS 2 0において発行先アプリケーションをワークメモリ3 7から削除してアプリケーションを強制終了する。

【0082】

以上のモジュールマネージャ3 4の処理を、図2 4を参照しながら説明する。

図2 4は、アプリケーション終了の過程を模式的に示した図である。本図における第1段目は、アプリケーションマネージャ3 6を、第2段目は、3つのアプリケーションを示す。図2 4の第2段目、左側のアプリケーションは、terminateイベントを受信して終了プロセスに成功したアプリケーションを示す。図2 4の第2段目、中列のアプリケーションは、terminateイベントを受信したが終了プロセスに失敗したアプリケーションを示す。第2段目、右側のアプリケーションは、EventListenerが実装されていないので、terminateイベントを受信することができなかったアプリケーションを示す。

【0083】

第1段目ー第2段目間の矢印ep1, ep2は、アプリケーションマネージャによるterminateイベント発行を模式的に示し、矢印ep3は、終了プロセス起動を模式的に示している。

第3段目は、終了プロセス成功時における状態遷移後の状態であり、このアプリケーションは、自身の終了プロセスにより終了することになる。これらxletプログラムのように、所定の期間内に終了しないアプリケーションがあれば、アプリケーションマネージャ3 6は、それらを強制的にワークメモリ3 7から取り除く。第4段目は、アプリケーションマネージャ3 6による強制終了を示す。かかる第4段目の強制終了を規定するのも、アプリケーションマネージャ3 6の1つの使命といえる。

【0084】

以上のように本実施形態によれば、分岐元タイトルで起動しており、分岐先タイトルで生存していないアプリケーションは、自動的に終了させられるので、条件付き分岐により再生が複雑に進行する場合でも、再生装置におけるリソースの限界を越える数のアプリケーション立ち上げはなされ無い。分岐前後におけるアプリケーション動作を保証することができるので、デジタルストリームを再生させながら、アプリケーションを実行させるようなディスクコンテンツを多く頒布することができる。

【0085】

(第2実施形態)

第1実施形態においてアプリケーションの生存区間は、タイトル時間軸と一致していたが、第2実施形態は、PL時間軸の一部をアプリケーションの生存区間とすることを提案する。PL時間軸の一部は、チャプターにより表現されるので、チャプターにて開始点、終了点を記述することにより、アプリケーションの生存区間を規定することができる。図2 5 (a)は、PL時間軸上に生存区間を定めたアプリケーション管理テーブルを示す図である。図2 5 (a)においてアプリケーション管理テーブルには、3つのアプリケーションが記述されており、このうちapplication# 2は、title# 1のChapter# 2からChapter# 3までが生存区間に指定され、起動属性にAutoRunが規定されている。このためapplication# 2は、図2 5 (b)に示すように、Chapter# 2の始点で起動され、Chapter# 3の終点で終了

することになる。

【0086】

一方application#3は、title#1のChapter#4からChapter#6までが生存区間に指定されている。このためapplication#3は、図25(b)に示すように、図25(b)に示すように、Chapter#4の始点で起動され、Chapter#6の終点で終了することになる。

こうして記述されたアプリケーション管理テーブルに基づき、処理を行うため本実施形態に係るアプリケーションマネージャ36は、PLmarkにより指示されるチャプター開始点に到達する度に、そのチャプター開始点から生存区間が始まるアプリケーションが存在するか否かを判定し、もし存在すればそのアプリケーションをワークメモリ37にロードする。

10

【0087】

同様に、チャプター開始点に到達する度に、そのチャプターの直前のチャプターで生存区間が終わるアプリケーションが存在するか否かを判定し、もし存在すればそのアプリケーションをワークメモリ37から解放する。

チャプターという単位でアプリケーションの生存を管理すれば、アプリケーションの生存区間をより細かい精度で指定することができる。しかしディスクコンテンツには、時間軸の逆向がありうることに留意せねばならない。逆行とは、巻戻しにより時間軸を逆向きに進行することである。チャプターの境界でこの逆行と、進行とが繰り返されれば、ワークメモリへのロード、廃棄が何度もなされ、余分な読出負荷が生じる。そこで本実施形態では、アプリケーションの起動時期を、タイトルに入ってPlayback Control Engine32による通常再生が開始された瞬間にしている。ここでPLの再生には、通常再生、トリック再生がある。トリック再生とは、早送り、巻戻し、SkipNext, SkipBackがある。かかる、早送り、巻戻し、SkipNext, SkipBackがなされている間、アプリケーション起動を開始せず、通常再生が開始されて初めて、アプリケーションを起動するのである。通常再生開始の瞬間を基準にすることにより、上述したような生存区間前後の行き来があった場合でも、アプリケーションの起動が必要以上に繰り返されることはない。尚、通常再生開始の瞬間を、アプリケーションの起動基準にすると処理は、生存区間がtitleである場合にも、実行してよい。

20

【0088】

以上のように本実施形態によれば、PLより小さい、チャプターの単位でアプリケーションの生存区間を規定することができるので、緻密なアプリケーション制御を実現することができる。

30

(第2実施形態の変更例)

図25では、各アプリケーションに優先度が付与されている。この優先度は、0~255の値を取り、アプリケーション間でリソースの使用が競合等が競合した場合、どちらのアプリケーションを強制的に終了させるか、また、どちらのアプリケーションからリソースを奪うかという処理をアプリケーションマネージャ36が行うにあたって、判断材料になる。図25の一例では、application#1の優先度は255, application#2, application#3の優先度は128なので、application#1-application#2の競合時において、アプリケーションマネージャ36は優先度が低いapplication#2を強制終了するとの処理を行う。

40

【0089】

(第3実施形態)

BD-ROMにより供されるディスクコンテンツは、互いに分岐可能な複数タイトルから構成される。各タイトルは、1つ以上のPLと、このPLを用いた制御手順とからなるもの以外に、再生装置に対する制御手順のみからなる非AV系タイトルがある。本実施形態は、この非AV系タイトルについて説明する。

【0090】

こうした非AV系タイトルのタイトルでは、どのようにタイトル時間軸を定めるのかが問題になる。図26(a)は、PL時間軸から定まるタイトル時間軸を示す。この場合PL時間軸がタイトル時間軸になり、このタイトル時間軸上にアプリケーションの生存区間が定ま

50

る。この基準となるPL時間軸がない場合、タイトル時間軸は図26(b)(c)のように定めるべきである。

【0091】

図26(b)は、メインとなるアプリケーションの生存区間から定まるタイトル時間軸を示す。メインアプリとは、タイトルにおいて起動属性がAutoRunに設定され、タイトル開始時に自動起動される唯一のアプリケーションであり、例えばランチャーアプリと呼ばれるものがこれにあたる。ランチャーアプリとは、他のアプリケーションを起動するアプリケーションプログラムである。

【0092】

この図26(b)の考え方は、メインアプリが起動している限り、タイトル時間軸は継続していると考え、メインアプリが終了すれば、時間軸を終結させるというものである。図26(c)は、複数アプリケーションの生存区間から定まるタイトル時間軸を示す図である。タイトルの開始点で起動されるのは1つのアプリケーションであるが、このアプリケーションが他のアプリケーションを呼び出し、更にこのアプリケーションが別のアプリケーションを呼び出すとの処理が繰り返されるというケースがある。この場合、どれかのアプリケーションが起動している限り、タイトル時間軸は継続していると考え、どのアプリケーションも起動していない状態が到来すれば、そこでタイトル時間軸は終結するという考え方である。このように非AV系タイトルのタイトル時間軸を定めれば、AVタイトルであっても、非AV系タイトルであっても、タイトル時間軸の終結と同時に、所定のタイトルに分岐するという処理を画一的に行うことができる。尚非AVタイトルにおけるタイトル時間軸は、AVタイトルと対比する上で、想定した架空の時間軸に過ぎない。故に再生装置は、非AVタイトルにおけるタイトル時間軸上を逆行したり、任意の位置に頭出しすることができない。

【0093】

以上は本実施形態における記録媒体に対する改良である。続いて本実施形態における再生装置に対する改良について説明する。

上述したような手順でタイトル終了を行うため第3実施形態に係るアプリケーションマネージャ36は、図27に示すような処理で処理を行う。図27は、タイトル再生時におけるアプリケーションマネージャ36の処理手順を示すフローチャートである。本フローチャートは、タイトル再生中、ステップS21～ステップS23を繰り返すというループ構造になっている。

【0094】

ステップS21は、タイトルジャンプAPIが呼び出されたか否かの判定であり、呼び出されれば、ジャンプ先タイトルへの分岐をモジュールマネージャ34に要求する(ステップS27)。

ステップS22は、タイトル内のアプリケーション呼出を担っているようなメインアプリが存在するか否かの判定であり、もし存在するなら、その起動の有無を確認する(ステップS25)。起動してなければ、“タイトルの終わり”であると解釈し、モジュールマネージャ34に終結を通知する(ステップS26)。

【0095】

ステップS23は、メインアプリがない場合に実行されるステップであり(ステップS22でNo)、どのアプリケーションも起動していない状態かどうかを判定する。もしそうなら、同じく“タイトルの終わり”であると解釈し、モジュールマネージャ34に終結を通知する(ステップS26)。

以上のように本実施形態によれば、PL再生を伴わないタイトルであっても、アプリケーション実行中は分岐せず、アプリケーション実行が終了して初めて分岐するという処理が可能になる。

【0096】

(第4実施形態)

本実施形態は、DVDと同様のメニュー制御をBD-ROM上で実現する場合の改良に関する。

図28(a)は、BD-ROMにより実現されるメニュー階層を示す図である。本図におけるメニュー階層は、TopMenuを最上位に配し、このTopMenuから下位のTitleMenu、SubTitleMenu、AudioMenuを選択できる構造になっている。図中の矢印sw1,2,3は、ボタン選択によるメニュー切り換えを模式的に示す。TopMenuとは、音声選択、字幕選択、タイトル選択の何れを行うかを受け付けるボタン(図中のボタンsn1, sn2, sn3)を配置したメニューである。

【0097】

TitleMenuとは、映画作品(title)の劇場版を選択するか、ディレクターズカット版を選択するか、ゲーム版を選択するか等、映画作品の選択を受け付けるボタンを配置したメニューである。AudioMenuとは、音声再生を日本語で行うか、英語で行うかを受け付けるボタンを配置したメニュー、SubTitleMenuとは、字幕表示を日本語で行うか、英語で行うかを受け付けるボタンを配置したメニューである。

10

【0098】

こうした階層をもったメニューを動作させるためのMOVIEオブジェクトを図28(b)に示す。図28(b)においてMovieObject.bdmvには、FirstPlay OBJ、TopMenu OBJ、AudioMenu OBJ、SubTitleMenu OBJが格納されている。

FirstPlayオブジェクト(FirstPlay OBJ)は、再生装置へのBD-ROMのローディング時に自動的に実行される動的シナリオである。

【0099】

TopMenuオブジェクト(TopMenu OBJ)は、TopMenuの挙動を制御する動的シナリオである。ユーザがメニューコールを要求した際、呼び出されるのはこのTopMenuオブジェクトである。TopMenuオブジェクトは、ユーザからの操作に応じてTopMenu中のボタンの状態を変えるものや、ボタンに対する確定操作に応じて分岐を行う分岐コマンドを含む。この分岐コマンドは、TopMenuからTitleMenu、TopMenuからSubTitleMenu、TopMenuからAudioMenuというメニュー切り換えを実現するものである。

20

【0100】

AudioMenuオブジェクト(AudioMenu OBJ)は、AudioMenuの挙動を制御する動的シナリオであり、ユーザからの操作に応じてAudioMenu中のボタンの状態を変えるコマンドや、ボタンに対する確定操作に応じて音声設定を更新するコマンドを含む。

SubTitleMenuオブジェクト(SubTitleMenu OBJ)は、SubTitleMenuの挙動を制御する動的シナリオであり、ユーザからの操作に応じてSubTitleMenu中のボタンの状態を変えるコマンドや、ボタンに対する確定操作に応じて字幕設定用のPSRを更新するコマンドを含む。

30

【0101】

TitleMenuオブジェクト>TitleMenu OBJ)は、TitleMenuの挙動を制御する動的シナリオであり、TitleMenu中のボタンの状態を変えるものや、ボタンに対する確定操作に応じて分岐を行う分岐コマンドをふくむ。

これらのメニュー用MOVIEオブジェクトにより、DVDで実現されているようなメニューの挙動を実現することができる。以上がメニュー制御に関連するMOVIEオブジェクトである。

40

【0102】

図29は、Index Tableと、Index Tableから各Movieオブジェクトへの分岐とを模式化した図である。本図では左側にIndex Tableの内部構成を示している。本実施形態におけるIndex Tableには、FirstPlayINDEX、TopMenuINDEX、Audio MenuINDEX、Subtitle MenuINDEX、title MenuINDEX、title #1～#mINDEX、title #m+1～#nINDEX、title #0INDEXを含む。図中の矢印bc1,2は、Index TableからFirstPlayOBJへの分岐と、FirstPlayOBJからTopMenuへの分岐とを模式的に示し、矢印bc3,4,5は、TopMenuからTitleMenu、SubTitleMenu、AudioMenuへの分岐を模式的に示している。矢印bc6,7,8は、TitleMenuから各Movieオブジェクトへの分岐を模式的に示している。

【0103】

50

FirstPlayINDEX、TopMenuINDEX、Audio MenuINDEX、Subtitle MenuINDEX、title MenuINDEXは、それぞれ、FirstPlayOBJ、TopMenuOBJ、Audio MenuOBJ、Subtitle MenuOBJ、title MenuOBJについてのIndexであり、これらの識別子が記述される。

title #1～#mINDEXは、BD-ROMにおいて1からm番目にエンタリーされているtitleについてのIndexであり、これら1からmまでのtitle番号の選択時において分岐先となるMOVIEオブジェクトの識別子(ID)が記述される。

【0104】

title #m+1～#nINDEXは、BD-ROMにおいてm+1からn番目にエンタリーされているtitleについてのIndexであり、これらm+1からnまでのtitle番号の選択時において分岐先となるBD-Jオブジェクトの識別子(ID)が記述される。

title #0INDEXは、BD-Jオブジェクトの強制終了時において分岐先になるべきMovieオブジェクト又はBD-Jオブジェクトを規定するINDEXである。本実施形態では、TopMenuOBJについての識別子が、このtitle #0INDEXに格納されている。

【0105】

図30(a)は、図29のようにIndex Tableが記述された場合における分岐を示す。Index Tableがこのように記述されているので、ラベルtitle #1～title #mを分岐先とした分岐コマンドの実行時には、title #1Index～title #mIndexからMovieオブジェクト #1～#mの識別子が取り出される。ラベルtitle #m+1～title #nを分岐とした分岐コマンドの実行時には、title #m+1Index～title #nIndexからBD-Jオブジェクト #m+1～#nの識別子が取り出される。BD-Jオブジェクト #m+1～#nの識別子は、ファイル名を表す5桁の数値であるので、『00001.BD-J, 00002.BD-J, 00003.BD-J・・・』が取り出され、そのファイル名の動的シナリオがメモリに読み出されて、実行されることになる。これがIndex Tableを用いた分岐処理である。

【0106】

図30(b)は、BD-Jオブジェクト実行時の強制終了時における分岐を示す図である。強制終了時における分岐では、title #0Indexから識別子が取り出されて、その識別子の動的シナリオが再生装置により実行される。この識別子が、トップメニュータイトルの識別子なら、アプリケーション強制終了時には、自動的にトップメニューOBJが選択されることになる。

以上は本実施形態における記録媒体に対する改良である。続いて本実施形態における再生装置に対する改良について説明する。上述した記録媒体の改良に対応するため、再生装置内のモジュールマネージャ34は図31に示すような処理手順で処理を行う。図31は、モジュールマネージャ34の処理手順を示すフローチャートである。本フローチャートは、ステップS31、ステップS32からなるループ処理を構成しており、ステップS31又はステップS32のどちらかがYesになった際、対応する処理を実行するものである。

【0107】

ステップS31は、タイトルジャンプAPIの呼び出しがあったか否かの判定である。もしタイトルジャンプAPIの呼び出しがあれば、分岐先ラベルであるタイトル番号jを取得し(ステップS33)、Index Tableにおけるタイトル番号jのIndexから、IDjを取り出して(ステップS34)、IDjのMovieオブジェクト又はBD-Jオブジェクトを、HDMVモジュール33又はBD-Jモジュール35に実行させる(ステップS35)。

【0108】

ステップS32は、タイトル終了がアプリケーションマネージャ36から通知されたか否かの判定であり、もし通知されれば(ステップS32でYes)、トップメニュータイトルを構成するトップメニューOBJをHDMVモジュール33又はモジュールマネージャ34に実行させる(ステップS36)。

以上のアプリケーションマネージャ36によるアプリケーション強制終了の動作例を、図32を参照しながら説明する。ここで再生すべきタイトルは、落下するタイル片を積み

重ねるというゲームアプリを含む非AV系タイトルである。図32の下段は、アプリケーションの生存区間からなるタイトル時間軸を示し、上段は、タイトル時間軸において表示される画像を示す。非AV系タイトルがゲームアプリである場合、このゲームアプリの生存区間において、図32の上段左側のように、ゲームアプリの一画面が表示される。ゲームアプリにバグがあり、異常終了すると、アプリケーションマネージャ36は図23のフローチャートに従ってゲームアプリを強制終了させ、タイトルの終了をモジュールマネージャ34に通知する。タイトル終了が通知されると、モジュールマネージャ34はトップメニュータイトルに分岐する。そうすると、図32の上段右側に示すような画像が表示され、ユーザの操作待ちになる。

10

以上のように本実施形態によれば、プログラムが含むが、デジタルストリームは含まないような非AV系タイトルの終了時においても、トップメニュータイトルに分岐するという制御が可能になる。これによりアプリケーションプログラムがエラー終了したとしても、ブラックアウトやハングアップの発生を回避することができる。

【0109】

(第5実施形態)

BD-Jモードにおいて、PL再生との同期をどのように実現するかという改良に関する。図8(b)の一例においてJMFプレーヤインスタンスの再生を命じるJMFプレーヤインスタンス(A.play;)をJava仮想マシン38が解釈した場合、Java仮想マシン38はPL再生APIをコールして、コール直後に“サクセス”を示す応答をアプリケーションに返す。

20

【0110】

Playback Control Engine32は、PL再生APIがコールされれば、PL情報に基づく処理手順を実行する。PLが2時間という再生時間を有するならば、この2時間の間、上述した処理は継続することになる。ここで問題になるのは、Java仮想マシン38がサクセス応答を返す時間と、Playback Control Engine32が実際に処理を終える時間とのギャップである。Java仮想マシン38は、イベントドリブンの処理主体であるためコール直後に再生成功か、再生失敗かを示す応答を返すが、Playback Control Engine32による実際の処理終了は2時間経過後であるので、サクセス応答をアプリケーションに返す時間を基準にしたのでは、2時間経過後にあたる処理終結を感知しえない。PL再生において早送り、巻戻し、Skipが行われると、この2時間という再生期間は2時間前後に変動することになり、処理終結の感知は更に困難になる。

30

【0111】

Playback Control Engine32は、アプリケーションとスタンドアローンで動作するため、第3実施形態のような終了判定では、PL再生の終了をタイトル終了と解釈することができない。そこで本実施形態では、アプリケーションが終了してようがいまいが、ワークメモリ37にJMFプレーヤインスタンスがある限り、つまり、Presentation Engine31の制御権をBD-Jモジュール35が掌握している間、Playback Control Engine32から再生終結イベントを待つ。そして再生終結イベントがあれば、タイトルが終了したと解釈して、次のタイトルへの分岐を行うようモジュールマネージャ34に通知する。こうすることにより、Playback Control Engine32がPL再生を終結した時点を、タイトルの終端とすることができる。

40

【0112】

以降図33～図37のフローチャートを参照して、Playback Control Engine32による具体的な制御手順を説明する。

図33は、Playback Control Engine32によるPL再生手順を示すフローチャートである。この再生手順は、Presentation Engine31に対する制御(ステップS46)と、BD-ROMドライブ1又はHDD17に対する制御(ステップS48)とを主に含む。本フローチャートにおいて処理対象たるPlayItemをPlayItem#xとする。本フローチャートは、カレントPL情報(.mpls)の読み込みを行い(ステップS41)、その後、ステップS42～ステップS50の処理を実行するというものである。ここでステップS42～ステップS50は、ス

50

ステップS 4 9 がYesになるまで、カレントPL情報を構成するそれぞれのPI情報について、ステップS 4 3～ステップS 5 0 の処理を繰り返すというループ処理を構成している。このループ処理において処理対象となるPlayItemを、PlayItem# x (PI# x) とよぶ。このPlayItem# xは、カレントPLの先頭のPlayItemに設定されることにより、初期化される(ステップS 4 2)。上述したループ処理の終了要件は、このPlayItem# xがカレントPLの最後のPlayItemになることであり(ステップS 4 9)、もし最後のPlayItemでなければ、カレントPLにおける次のPlayItemがPlayItem# xに設定される(ステップS 5 0)。

【0113】

ループ処理において繰り返し実行されるステップS 4 3～ステップS 5 0 は、PlayItem# xのClip__information__file__nameで指定されるClip情報をシナリオメモリ21に読み込み(ステップS 4 3)、PlayItem# xのIn__timeを、カレントClip情報のEPmapを用いて、Iピクチャアドレスuに変換し(ステップS 4 4)、PlayItem# xのOut__timeを、カレントClip情報のEP__mapを用いて、Iピクチャアドレスvに変換して(ステップS 4 5)、これらの変換で得られたアドレスvの次のIピクチャを求めて、そのアドレスの1つ手前をアドレスwに設定し(ステップS 4 7)、そうして算出されたアドレスwを用いて、IピクチャアドレスuからアドレスwまでのTSパケットの読み出しをBD-ROMドライブ1又はHDD17に命じるというものである(ステップS 4 8)。

【0114】

一方、Presentation Engine31に対しては、カレントPLMarkのmark__time__stampからPlayItem# xのOut__timeまでの出力を命じる(ステップS 4 6)。以上のステップS 4 5～ステップS 4 8により、AVClipにおいて、PlayItem# xにより指示されている部分の再生がなされることになる

その後、PlayItem# xがカレントPLの最後のPIであるかの判定がなされる(ステップS 4 9)。

【0115】

PlayItem# xがカレントPLの最後のPIでなければ、カレントPLにおける次のPlayItemを、PlayItem# xに設定して(ステップS 5 0)、ステップS 4 3に戻る。以上のステップS 4 3～ステップS 5 0を繰り返すことにより、PLを構成するPIは順次再生されることになる。

図34は、アングル切り換え手順及びSkipBack, SkipNextの手順を示すフローチャートである。本フローチャートは、図33の処理手順と並行してなされるものであり、ステップS 5 1～S 5 2からなるループ処理を繰り返すというものである。本ループにおけるステップS 5 1は、アングル切り換えを要求するAPIが、Java仮想マシン38からコールされたか否かの判定であり、アングル切り換えAPIのコールがあれば、カレントClip情報を切り換えるという操作を実行する。

【0116】

図34のステップS 5 5は、判定ステップであり、PlayItem# xのis__multi__anglesがオンであるか否かの判定を行う。is__multi__anglesとは、PlayItem# xがマルチアングルに対応しているか否かを示すフラグであり、もしステップS 5 5がNoであるならステップS 5 3に移行する。ステップS 5 5がYesであるなら、ステップS 5 6～ステップS 5 9を実行する。ステップS 5 6～ステップS 5 9は、切り換え後のアングル番号を変数yに代入して(ステップS 5 6)、PlayItem# xにおけるy番目のClip__information__file__nameで指定されているClip情報をシナリオメモリ21に読み出し(ステップS 5 7)、カレントPTMを、カレントClip情報のEP__mapを用いてIピクチャアドレスuに変換し(ステップS 5 8)、PlayItem# xのOut__timeを、カレントClip情報のEP__mapを用いてIピクチャアドレスvに変換する(ステップS 5 9)というものである。こうしてIピクチャアドレスu, vを変化した後、ステップS 4 6に移行する。ステップS 4 6への移行により、別のAVClipからTSパケットが読み出されるので、映像内容が切り換わることになる。

【0117】

一方、図34のループにおけるステップS 5 2は、SkipBack/SkipNextを意味するAPIが

Java仮想マシン38からコールされたか否かの判定であり、もしコールされれば、図35のフローチャートの処理手順を実行する。図35は、SkipBack, SkipNextAPIがコールされた際の処理手順を示すフローチャートである。SkipBack, SkipNextを実行するにあたっての処理手順は多種多様なものである。ここで説明するのはあくまでも一例に過ぎないことに留意されたい。

【0118】

ステップS61は、PSRで示されるカレントPI番号、及び、カレントPTMを変換することにより、カレントMark情報を得る。ステップS62は、押下されたのがSkipNextキーであるか、SkipBackキーであるかの判定であり、SkipNextキーであるならステップS63において方向フラグを+1に設定し、SkipBackキーであるならステップS64において方向フラグを-1に設定する。

【0119】

ステップS65は、カレントPLMarkの番号に方向フラグの値を足した番号を、カレントPLMarkの番号として設定する。ここでSkipNextキーであるなら方向フラグは+1に設定されているのでカレントPLMarkはインクリメントされることになる。SkipBackキーであるなら方向フラグは-1に設定されているので、カレントPLMarkはデクリメントされることになる。

【0120】

ステップS66では、カレントPLMarkのref_to_PlayItem_Idに記述されているPIを、PlayItem#xに設定し、ステップS67では、PlayItem#xのClip_information_file_nameで指定されるClip情報を読み込む。ステップS68では、カレントClip情報のEP_mapを用いて、カレントPLMarkのmark_time_stampを、Iピクチャアドレスuに変換する。一方ステップS69では、PlayItem#xのOut_timeを、カレントClip情報のEP_mapを用いて、Iピクチャアドレスvに変換する。ステップS70は、カレントPLMarkのmark_time_stampからPlayItem#xのOut_timeまでの出力をPresentation Engine31に命じた上で、図33のステップS47に移行する。こうしてIピクチャアドレスu,vを変化して、別の部分の再生を命じた上でステップS47への移行するので、別のAVClipからTSパケットが読み出されることになり、映像内容が切り換えが実現する。

【0121】

図36は、Presentation Engine31による処理手順の詳細を示すフローチャートである。本フローチャートは、IピクチャのPTSをカレントPTMに設定した後で(ステップS71)、ステップS72～ステップS77からなるループ処理を実行するものである。

続いてステップS72～ステップS77におけるループ処理について説明する。このループ処理は、カレントPTMにあたるピクチャ、オーディオの再生出力と、カレントPTMの更新とを繰り返すものである。本ループ処理におけるステップS76は、ループ処理の終了要件を規定している。つまりステップS76は、カレントPTMがPI#xのOut_timeであることをループ処理の終了要件にしている。

【0122】

ステップS73は、早送りAPI、又は、早戻しAPIがJava仮想マシン38からコールされたか否かの判定である。もしコールされれば、ステップS78において早送りか早戻しかの判定を行い、早送りであるなら、次のIピクチャのPTSをカレントPTMに設定する(ステップS79)。このようにカレントPTMを、次のIピクチャのPTSに設定することで、1秒飛びにAVClipを再生してゆくことができる。これにより、2倍速等でAVClipは順方向に早く再生されることになる。早戻しであるなら、カレントPTMがPlayItem#xのOut_timeに到達したかを判定する(ステップS80)。もし到達してないのなら、1つ前のIピクチャのPTSをカレントPTMに設定する(ステップS81)。このように読出先アドレスAを、1つ前のIピクチャに設定することで、AVClipを後方向に1秒飛びに再生してゆくことができる。これにより、2倍速等でAVClipは、逆方向に再生されることになる。尚、早送り、巻戻しを実行するにあたっての処理手順は多種多様なものである。ここで説明するのはあくまでも一例に過ぎないことに留意されたい。

10

20

30

40

50

【0123】

ステップS74は、メニューコールAPIがコールされたか否かの判定であり、もしコールされれば、現在の再生処理をサスペンドして(ステップS82)、メニュー処理用のメニュープログラムを実行する(ステップS83)。以上の処理により、メニューメニューコールがなされた場合は、再生処理を中断した上で、メニュー表示のための処理が実行されることになる。

【0124】

ステップS75は、sync_PlayItem_idにより、PlayItem#xを指定したSubPlayItem#yが存在するか否かの判定であり、もし存在すれば、図37のフローチャートに移行する。図37は、SubPlayItemの再生手順を示すフローチャートである。本フローチャートでは、先ずステップS86において、カレントPTMはSubPlayItem#yのsync_start_PTS_of_playItemであるか否かを判定する。もしそうであれば、ステップS93においてSubPlayItem#yに基づく再生処理を行うようPlayback Control Engine32に通知する。

10

【0125】

図37のステップS87～ステップS92は、SubPlayItem#yに基づく再生処理を示すフローチャートである。

ステップS87では、SubPlayItem#yのClip_information_file_nameで指定されるClip情報を読み込む。ステップS88では、カレントClip情報のEP_mapを用いて、SubPlayItem#yのIn_timeを、アドレス α に変換する。一方ステップS89では、SubPlayItem#yのOut_timeを、カレントClip情報のEP_mapを用いて、アドレス β に変換する。ステップS90は、SubPlayItem#yのIn_timeからSubPlayItem#yのOut_timeまでの出力をデコーダに命じる。これらの変換で得られたアドレス β の次のIピクチャを求めて、そのアドレスの1つ手前をアドレス γ に設定し(ステップS91)、そうして算出されたアドレス γ を用いて、SubClip#zにおけるアドレス α からアドレス γ までのTSパケットの読み出しをBD-ROMドライブ1又はHDD17に命じるというものである(ステップS92)。

20

【0126】

また図33に戻ってPlayback Control Engine32の処理の説明の続きを行う。ステップS53はPresentation Engine31による再生制御が完了したかの判定であり、最後のPlayItem#xに対して、図36のフローチャートの処理が行われている限り、ステップS53がNoになる。図36のフローチャートの処理が終了して初めて、ステップS53はYesになりステップS54に移行する。ステップS54は、Java仮想マシン38への再生終結イベントの出力であり、この出力により、2時間という再生時間の経過をJava仮想マシン38は知ることができる。

30

【0127】

以上が本実施形態におけるPlayback Control Engine32、Presentation Engine31の処理である。続いて本実施形態におけるアプリケーションマネージャ36処理手順について説明する。図38は、第5実施形態に係るアプリケーションマネージャ36の処理手順を示すフローチャートである。

図38のフローチャートは、図27のフローチャートを改良したものである。その改良点は、ステップS21～ステップS22間にステップS24が追加され、このステップS24がYesになった際、実行されるステップS101が存在する点である。

40

【0128】

ステップS24は、JMFプレーヤインスタンスがワークメモリ37に存在するか否かの判定であり、もし存在しなければステップS22に移行する。存在すれば、ステップS101に移行する。ステップS101は、Playback Control Engine32から再生終結イベントが出力されたか否かの判定であり、もし出力されれば、ワークメモリ中のJavaプレーヤインスタンスを消滅させた上で(ステップS102)、タイトル終了をモジュールマネージャ34に通知する(ステップS26)。通知されねば、ステップS21～ステップS24からなるループ処理を繰り返す。

【0129】

50

以上のフローチャートにおいて、ワークメモリ 37 に JMF プレーヤインスタンスが存在する限り (ステップ S 24 で Yes)、ステップ S 22、ステップ S 23 はスキップされる。そのため、たとえ全てのアプリケーションが終了したとしてもタイトルは継続中と解釈される。

以上のように本実施形態によれば、2 時間という再生時間の経過時点を実アプリケーションマネージャ 36 は把握することができるので、PL 再生の終了条件にメニューを表示して、このメニューに対する操作に応じて他のタイトルに分岐するという制御を実現することができる。

【0130】

(第 6 実施形態)

第 6 実施形態は、BD-J オブジェクトにデータ管理テーブルを設ける改良に関する。

データ管理テーブル (DMT) は、そのタイトル時間軸においてローカルメモリ 29 上にロードすべき Java アーカイブファイルを、読込属性と、読込優先度とに対応づけて示すテーブルである。“ローカルメモリ 29 における生存”とは、そのアプリケーションを構成する Java アーカイブファイルがローカルメモリ 29 から読み出され、Java 仮想マシン 38 内のワークメモリ 37 への転送が可能になっている状態をいう。図 39 は、データ管理テーブルの一例を示す図である。本図に示すようにデータ管理テーブルは、アプリケーションの『生存区間』と、その生存区間をもったアプリケーションを識別する『applicationID』と、そのアプリケーションの『読込属性』と、『読込優先度』とを示す。

【0131】

上述したようにアプリケーション管理テーブルには、生存区間という概念があり、データ管理テーブルにも同じ生存区間という概念がある。アプリケーション管理テーブルと同じ概念を、データ管理テーブルに設けておくというのは一見無駄のように思えるがこれには意図がある。

図 40 は、BD-J オブジェクトが想定している実行モデルを示す図である。本図における実行モデルは、BD-ROM、ローカルメモリ 29、Java 仮想マシン 38 からなり、BD-ROM、ローカルメモリ 29、ワークメモリ 37 という三者の関係を示す。矢印 my1 は、BD-ROM → ローカルメモリ 29 間の読み込みを示し、矢印 my2 は、ローカルメモリ 29 → ワークメモリ 37 間の読み込みを示す。矢印上の注釈は、これらの読み込みが、どのようなタイミングでなされるかを示す。注釈によると、BD-ROM → ローカルメモリ 29 間の読み込みは、いわゆる“先読み”であり、アプリケーションが必要となる以前の時点に行われねばならない。

【0132】

また注釈によると、ローカルメモリ 29 → ワークメモリ 37 間の読み込みは、アプリケーションが必要になった際になされることがわかる。“必要になった際”とは、アプリケーションの生存区間が到来した時点 (1)、アプリケーションの呼出が他のアプリケーション又はアプリケーションマネージャ 36 から指示された時点 (2) を意味する。

矢印 my3 は、ワークメモリ 37 におけるアプリケーションの占有領域の解放を示し、矢印 my4 は、ローカルメモリ 29 におけるアプリケーションの占有領域の解放を示す。矢印上の注釈は、これらの読み込みが、どのようなタイミングでなされるかを示す。注釈によると、ワークメモリ 37 上の解放は、アプリケーション終了と同時になされることがわかる。一方ローカルメモリ 29 上の解放は、Java 仮想マシン 38 にとって必要でなくなった時点になされる。この必要でなくなった時点とは、“終了時点”ではない。“終了した上、再起動の可能性もない時点”であること、つまり該当する title が終了した時点の意味する。上述した読込・解放のうち、ワークメモリ 37 における解放時点は、アプリケーション管理テーブルにおける生存区間から判明する。しかし“アプリケーションが必要となる以前の時点”、“終了した上、再起動の可能性もない時点”については、規定し得ない。そこで、オーサリング段階において、かかる時点ディスクコンテンツ全体の時間軸上で規定しておくため、本実施形態では各アプリケーションが生存している区間を、アプリケーション管理テーブルとは別に、データ管理テーブルに記述するようにしている。つまり“アプリケーションが必要となる以前の時点”をデータ管理テーブルにおける生存区間の始点

と定義し、“終了した上、再起動の可能性もない時点”をデータ管理テーブルの終点と定義することにより、上述したローカルメモリ29上の格納内容の遷移をオーサリング時に規定しておくことができる。これがデータ管理テーブルの記述意義である。

【0133】

データ管理テーブルによるローカルメモリ29生存区間の記述について説明する。ここで制作しようとするディスクコンテンツは3つのタイトル(title#1、title#2、title#3)からなり、これらタイトルの時間軸において、図41(b)に示すようなタイミングで、ローカルメモリ29を使用したいと考える。この場合、title#1時間軸の開始点においてapplication#1、application#2を構成するJavaアーカイブファイルをローカルメモリ29に読み込み、title#1時間軸の継続中、application#1、application#2をローカルメモリ29に常駐させておく。そしてtitle#2時間軸の始点で、application#1を構成するJavaアーカイブファイルをローカルメモリ29から解放して、代わりにapplication#3を構成するJavaアーカイブファイルをローカルメモリ29に読み込んで、常駐させるというものである(以降、アプリケーションを構成するJavaアーカイブファイルは、アプリケーションと同義に扱う。)。この場合のデータ管理テーブルの記述は、図41(a)の通りであり、アプリケーションのapplicationIDを、その生存区間に対応づけて記述することで、ローカルメモリ29に常駐すべきアプリケーションを表現する。図41(a)では、application#1のapplicationIDがtitle#1と対応づけられて記述されており、application#2のapplicationIDはtitle#1、title#2と対応づけられ、application#3のapplicationIDはtitle#3と対応づけられて記述されていることがわかる。こうすることで、ローカルメモリ29占有の時間的遷移がオーサリング担当者により規定されることになる。

【0134】

データ管理テーブル、アプリケーション管理テーブルの組合せとしては、アプリケーション管理テーブルに規定する生存区間は、細かい再生単位にし、データ管理テーブルに規定する生存区間は、大まかな再生単位にすることが望ましい。大まかな再生単位には、タイトル、PLといった非シームレスな再生単位が望ましい。一方、細かい再生単位としては、PL内のチャプターというようにシームレスな再生単位が望ましい。アプリケーションの生存区間をタイトル毎、PL毎に定めれば、アプリケーションはローカルメモリ29上に存在するので、そのタイトルの再生中においてアプリケーションは何時でも取り出せる状態になる。そうであれば、アプリケーションの生存区間を細かく定めたとしても、アプリケーションを即座に、仮想マシン上のワークメモリに読み出すことができるので、アプリケーションの起動・終了が頻繁になされたとしても、スムーズなアプリケーション実行を実現することができる。

【0135】

次に、読込属性について説明する。

図2においてJavaアーカイブファイルは、AVClipとは別の記録領域に記録されることを前提にしていた。しかしこれは一例に過ぎない。Javaアーカイブファイルは、BD-ROMにおいてAVClipが占める記録領域に埋め込まれることがある。この埋め込みの態様には、カルーセル化、インターリーブユニット化という2種類がある。

【0136】

ここで“カルーセル化”とは、対話的な放送の実現のために同一内容を繰り返すという放送方式に変換することである。BD-ROMは、放送されたデータを格納するものではないが、本実施形態では、カルーセルの放送形式に倣ってJAVAアーカイブファイルを格納するようにしている。図42は、カルーセル化によるJavaアーカイブファイル埋め込みを示す図である。第1段目は、AVClip中に埋め込むJavaアーカイブファイルであり、第2段目は、セクション化を示す。第3段目は、TSパケット化、第4段目は、AVClipを構成するTSパケット列を示す。こうしてセクション化、TSパケット化されたデータ(図中の“D”)が、AVClipに埋め込まれるのである。カルーセルによりAVClipに多重化されたJavaアーカイブファイルは、読み出すにあたって、低帯域で読み出されることになる。この低帯域での読み出しは、概して2〜3分というように長期間を要するため、再生装置はJavaアーカイブファイル

を2〜3分をかけて読み込むことになる。

【0137】

図43は、インターリーブ化によるJavaアーカイブファイル埋め込みを示す図である。第1段目は、埋め込まれるべきAVClip、第2段目は、AVClipにインターリーブ化されたJavaアーカイブファイル、第3段目は、BD-ROMの記録領域におけるAVClip配置である。本図に示すように、ストリームに埋め込まれるべきJavaアーカイブファイルは、インターリーブ化され、AVClipを構成するXXXXX.m2tsを構成する分割部分(図中のAVClip2/4, 3/4)の合間に記録される。インターリーブ化によりAVClipに多重化されたJavaアーカイブファイルは、カルーセル化と比較して、高い帯域で読み出されることになる。この高い帯域での読み出しであるため、再生装置はJavaアーカイブファイルを比較的短期間に読み込むことになる。

10

【0138】

カルーセル化・インターリーブ化されたJavaアーカイブファイルは、プリロードされるのではない。BD-ROMにおけるAVClipの記録領域のうち、カルーセル化・インターリーブ化されたJavaアーカイブファイルが埋め込まれた部分に、現在の再生時点が到達した際、再生装置のローカルメモリ29にロードされる。Javaアーカイブファイルの記録態様には、図2に示すものの他に、図42、図43(a)に示すものがあるので、読込属性は、図43(b)に示すように、設定されうる。図43(b)に示すように、読込属性は、タイトル再生に先立ち、ローカルメモリ29に読み込まれる旨を示す“Preload”と、タイトル再生中に、カルーセル化方式で読み込まれる旨を示す“Load.Carousel”と、タイトル再生中に、インターリーブ化方式で読み込まれる旨を示す“Load.InterLeave”とがある。読込属性には、カルーセル化されているか、インターリーブ化されているかが添え字で表現されているが、これを省略してもよい。

20

【0139】

データ管理テーブルにおける生存区間の具体的な記述例について、図44を参照しながら説明する。図44(a)は、データ管理テーブルの一例を示す図である。図44(b)は、かかるデータ管理テーブルの割り当てによるローカルメモリ29の格納内容の変遷を示す図である。本図は、縦軸方向にローカルメモリ29における占有領域を示し、横軸を示す図である。図44(a)は、1つのタイトル内のPL時間軸としている。データ管理テーブルにおいてapplication#1は、1つのタイトル内のPL時間軸全体を生存区間とするよう記述されているので、このタイトルのChapter#1〜Chapter#5においてローカルメモリ29内の領域を占有することになる。データ管理テーブルにおいてapplication#2は、タイトル内のPL#1におけるChapter#1〜Chapter#2を生存区間とするよう記述されているので、このタイトルのChapter#1〜Chapter#2においてローカルメモリ29内の領域を占有することになる。データ管理テーブルにおいてapplication#3は、タイトル内のPL#1におけるChapter#4〜Chapter#5を生存区間とするよう記述されているので、このタイトルのChapter#4〜Chapter#5においてローカルメモリ29内の領域を占有することになる。以上で、データ管理テーブルにおける生存区間についての説明を終える。

30

続いて読込優先度について説明する。読込優先度とは、ローカルメモリ29への読み込みに対する優劣を決める優先度である。読込優先度には複数の値がある。2段階の優劣を設けたい場合、Mandatoryを示す値、optionalを示す値を読込優先度に設定する。この場合、Mandatoryは高い読込優先度を意味し、optionalは、低い読込優先度を意味する。3段階の優劣を設けたい場合、Mandatoryを示す値、optional:high、optional:lowを示す値を読込優先度に設定する。Mandatoryは、最も高い読込優先度を示し、optional:highは、中程度の読込優先度、optional:lowは、最も低い読込優先度を示す。データ管理テーブルにおける読込優先度の具体的な記述例について、図45(a)(b)を参照しながら説明する。この具体例で、想定しているローカルメモリ29のメモリ規模は、図45(a)に示すようなものである。図45(a)は、新旧再生装置におけるローカルメモリ29のメモリ規模を対比して示す図である。矢印mk1は旧再生装置におけるメモリ規模を、矢印mk2は

40

50

新再生装置におけるメモリ規模をそれぞれ示す。この矢印の対比から、新再生装置におけるローカルメモリ29のメモリ規模は、旧再生装置のそれと比較して、三倍以上である状態を想定している。このようにメモリ規模にバラツキがある場合、アプリケーションは、図45に示すような2つのグループに分類される。1つ目は、どのようなメモリ規模であっても読み込むんでおくべきアプリケーション(#1, #2)である。2つ目は、旧再生装置での読み込みは望まないが、新再生装置での読み込みは希望するアプリケーション(#3, #4)である。読み込もうとするアプリケーションが、これら2つのグループに分類されれば、前者に帰属するアプリケーションに、読込優先度=Mandatoryを設定し、後者に属するアプリケーションに、読込優先度=Optionalを設定する。図45(b)は、読込優先度が設定されたデータ管理テーブルの一例を示す図である。データ管理テーブルをこのように設定した上で、application#1~application#4をBD-ROMに記録すれば、あらゆるメモリ規模の再生装置での再生を保証しつつも、メモリ規模が大きい再生装置では、より大きなサイズのデータを利用したアプリケーションを再生装置に再生させることができる。

【0140】

以上は本実施形態における記録媒体に対する改良である。続いて本実施形態における再生装置に対する改良について説明する。上述した記録媒体の改良に対応するため、アプリケーションマネージャ36は図46に示すような処理手順で処理を行う。

図46は、アプリケーションマネージャ36によるプリロード制御の処理手順を示す図である。本フローチャートは、再生すべきタイトルにおけるデータ管理テーブルを読み込み(ステップS111)、データ管理テーブルにおいて最も高い読込優先度をもちつつ、applicationIDが最も小さいアプリケーションをアプリケーションiにした上で(ステップS112)、ステップS113、ステップS114の判定を経た上で、アプリケーションiをローカルメモリ29にプリロードする(ステップS115)という処理を、ステップS116がNo及びステップS117がNoと判定されるまで、繰り返すというループ処理を構成している。

【0141】

ステップS113は、アプリケーションiの読込属性がプリロードであるか否かの判定であり、ステップS114は、アプリケーションの読込優先度が=MandatoryであるかOptionalであるかの判定である。ステップS113においてプリロードと判定され、ステップS114において読込優先度がMandatoryと判定されれば、アプリケーションはローカルメモリ29にプリロードされることになる(ステップS115)。もしステップS113において読込属性がロードであると判定されれば、ステップS114~ステップS115はスキップされることになる。

【0142】

ループ処理の終了要件を規定する2つのステップのうちステップS116は、applicationIDが次に高く、アプリケーションiと同一読込優先度のアプリケーションkが存在するかどうかを判定するものである。そのようなアプリケーションkが存在するなら、そのアプリケーションkをアプリケーションiにする(ステップS119)。

ループ処理の終了要件を規定する2つのステップのうちステップS117は、データ管理テーブルにおいて次に低い読込優先度をもつアプリケーションが存在するか否かの判定であり、もし存在すれば、その次に低い読込優先度をもつアプリケーションのうち、最も小さいapplicationIDをアプリケーションkを選んで(ステップS118)、そのアプリケーションkをアプリケーションiにする(ステップS119)。これらステップS116、ステップS117がYesになっている限り、上述したステップS113~ステップS115の処理は繰り返されることになる。ステップS116、ステップS117において、該当するアプリケーションが無くなれば本フローチャートの処理は終了することになる。

【0143】

ステップS120~ステップS123は、ステップS114において読込優先度=Optionalであると判定された場合に、実行される処理である。

ステップS120は、同じapplicationIDをもち、読込優先度が高いアプリケーションj

10

20

30

40

50

が存在するか否かの判定である。

ステップS 1 2 1は、ローカルメモリ29の残り容量がアプリケーションiのサイズを上回るか否かを判定するステップである。ステップS 1 2 0がNo、ステップS 1 2 1がYesである場合、ステップS 1 1 5においてアプリケーションiがローカルメモリ29にプリロードされることになる。ステップS 1 2 0がNo、ステップS 1 2 1がNoである場合、アプリケーションiはローカルメモリ29にプリロードされずそのままステップS 1 1 6に移行することになる。

【0144】

こうしておく、読込優先度=Optionalのデータは、ステップS 1 2 0〜ステップS 1 2 1の判定がYesにならないと、ローカルメモリ29へのプリロードがなされない。メモリ規模が小さい旧再生装置は、2〜3個のアプリケーションを読み込んだ程度で、ステップS 1 2 1の判定はNoになるが、メモリ規模が大きい新再生装置は、更に多くのアプリケーションを読み込んだとしても、ステップS 1 2 1の判定はNoにならない。以上のように、旧再生装置では、ローカルメモリ29にMandatoryのアプリケーションのみが読み込まれ、新再生装置には、Mandatoryのアプリケーションと、Optionalのアプリケーションとが読み込まれることになる。

【0145】

ステップS 1 2 2は、ステップS 1 2 0においてYesと判定された場合に実行されるステップである。同じapplicationIDをもち、読込優先度が高いアプリケーションjがローカルメモリ29上に存在する場合、ローカルメモリ29の残り容量と、アプリケーションjのサイズとの和が、アプリケーションiのサイズを上回るか否かを判定し(ステップS 1 2 2)、もし上回れば、アプリケーションiを用いてローカルメモリ29上のアプリケーションjを上書きすることによりプリロードする(ステップS 1 2 3)。下回る場合は、アプリケーションiはローカルメモリ29にプリロードされずそのままステップS 1 1 6に移行することになる。

【0146】

ステップS 1 1 5、ステップS 1 2 3による読込処理の一例を、図47(a)を参照しながら説明する。図47(a)は、この具体例が想定しているデータ管理テーブルの一例を示す図である。本図における3つのアプリケーションは、それぞれ3つのファイルに格納されており、applicationIDは同じであるが(applicationID=1)、読込優先度は互いに異なる(mandatory, optional:high, optional:low)。こうしたデータ管理テーブルが処理対象であると、ステップS 1 1 5により、読込優先度=Mandatoryのアプリケーションはローカルメモリ29に読み込まれる。しかし読込優先度=Optionalのアプリケーションについては、ステップS 1 2 0〜ステップS 1 2 2の判定を経た上で、ステップS 1 2 3において読み込まれる。ステップS 1 1 5と違いステップS 1 2 3では、既にローカルメモリ29にある同じapplicationIDのアプリケーションを上書きしてゆくよう、プリロードがなされるので、複数アプリケーションのうち1つが排他的に、ローカルメモリ29にロードされることになる。

i) 読込優先度=mandatoryのアプリケーションを読み込んだ後、読込優先度=optional:highのアプリケーションを読み込むにあたって、ステップS 1 2 2がNoと判定されれば、読込優先度=mandatoryのアプリケーションがローカルメモリ29に残ることになる。読込優先度=mandatoryのアプリケーションを読み込んだ後、読込優先度=optional:highのアプリケーションを読み込むにあたって、ステップS 1 2 2がYesと判定されれば、読込優先度=optional:highのアプリケーションにより、読込優先度=mandatoryのアプリケーションは上書きされ、読込優先度=optional:highのアプリケーションがローカルメモリ29に残ることになる。

【0147】

ii) 読込優先度=optional:highのアプリケーションを読み込んだ後、読込優先度=optional:lowのアプリケーションを読み込むにあたって、ステップS 1 2 2がNoと判定されれば、

ばれば、読込優先度=Mandatoryのアプリケーションがローカルメモリ29に残ることになる。読込優先度=optional:highのアプリケーションを読み込んだ後、読込優先度=optional:lowのアプリケーションを読み込むにあたって、ステップS122がYesと判定されれば、読込優先度=optional:lowのアプリケーションにより、読込優先度=optional:highのアプリケーションは上書きされ(ステップS123)、読込優先度=optional:lowのアプリケーションがローカルメモリ29に残ることになる。

【0148】

ローカルメモリ29の容量が許す限り、ローカルメモリ29上のアプリケーションを上書きしてゆくとの処理が繰り返されるので、ローカルメモリ29の格納内容は、図47(b)に示すように、mandatory=optional:high=>optional:lowと遷移してゆくことになる。メモリ規模に応じて、サイズが異なるJavaアーカイブファイルをローカルメモリ29にロードすることができるので、メモリ規模が小さい再生装置については、必要最小限の解像度をもったサムネイル画像を有するJavaアーカイブファイルを、メモリ規模が中程度の再生装置については、中程度の解像度をもったSD画像を有するJavaアーカイブファイルを、メモリ規模が大規模である再生装置については、高解像度をもったHD画像を有するJavaアーカイブファイルをローカルメモリ29にロードすることができる。かかるロードにより、メモリ規模に応じて解像度が異なる画像を表示させることができ、オーサリング担当者によるタイトル制作の表現の幅が広がる。

図48は、データ管理テーブルを参照した読取処理の具体例を示す図である。本図における2つのアプリケーションは、同じapplicationID(application#3)が付与された2つのアプリケーションを示す図である。そのうち一方は、AVClip中に埋め込まれていて、読込優先度がmandatoryに設定されている。他方は、AVClipとは別ファイルに記録されていて、読込優先度がOptionalに設定されている。前者のアプリケーションは、AVClipに埋め込まれているので、その埋込部分にあたる生存区間が、生存区間(title#1:chapter#4~#5)として記述されている。これらのアプリケーションのうちapplication#2、application#3には、ロードを示す読込属性が付与されている。application#2はChapter#1~Chapter#2を生存区間にしており、application#3はChapter#4~Chapter#5を生存区間にしており、タイトル時間軸においてどちらか一方が排他的にローカルメモリ29上に常駐することになる。図48(b)は、タイトル時間軸上の別々の時点において、排他的に格納されるapplication#2、application#3を示す図である。これは必要最低限のメモリ規模しかもたない再生装置での再生を念頭に置いた配慮である。こうした内容のデータ管理テーブルが処理対象であるとアプリケーションマネージャ36は、上述した図46のフローチャートによりメモリ規模に応じて異なる処理を行う。

【0149】

後者のアプリケーションは、読込優先度=ロードであるので、ローカルメモリ29にロードされる。かかる処理により、Mandatoryなメモリ規模さえあれば、アプリケーションマネージャはデータをローカルメモリ29にロードすることができる。ここで問題になるのは、メモリ規模が大きい再生装置による読み込み時である。メモリ規模が大きいにも拘らず、Chapter#4~Chapter#5に到達するまでapplication#3を読み込めないというのは、メモリ規模の無駄になる。そこで本図のデータ管理テーブルには、同じapplication#3にプリロードを示す読込属性を付与してBD-ROMに記録しておき、これらに同じapplicationIDを付与している。

【0150】

前者のアプリケーションは、読込優先度=Optionalであるので、ステップS121がYesになった場合に限り、プリロードされる(ステップS115)。こうすることで、メモリ規模が大きい再生装置は、title#1、Chapter#4~Chapter#5の到達を待つことなく、AVClipに埋め込まれているのと同じアプリケーションをローカルメモリ29にロードすることができるのである(図48(c))。

【0151】

10

20

30

40

50

以上がプリロード時における処理である。続いてロード時における処理手順について説明する。

図49は、データ管理テーブルに基づくロード処理の処理手順を示す図である。本フローチャートは、ステップS131～ステップS133からなるループ処理を、タイトル再生が継続されている間、繰り返すというものである。

【0152】

ステップS131は、AutoRunを示す起動属性を有したアプリケーションの生存区間が到来したか否かの判定である。もし到来すれば、AutoRunを示す起動属性を有したアプリケーションをアプリケーションqにして(ステップS134)、アプリケーションqを起動する旨の起動指示をJava仮想マシン38に発行して、アプリケーションqをローカルメモリ29からワークメモリ37に読み出させる(ステップS135)。

10

【0153】

ステップS133は、タイトル内PLの再生が全て終了したかの判定である。この判定は、第5実施形態に示したように、Playback Control Engine32からの再生終結イベントがあったか否かでなされる。もし終了すれば、本フローチャートの処理を終了する。

ステップS132は、起動中アプリケーションからの呼出があったか否かの判定である。もしあれば、呼出先アプリケーションをアプリケーションqにして(ステップS136)、現在の再生時点は、アプリケーション管理テーブルにおけるアプリケーションqの生存区間であるか否かを判定する(ステップS137)。もし生存区間でなければ、起動失敗を表示して(ステップS148)、ステップS131～ステップS133からなるループ処理に戻る。生存区間であれば、図50のフローチャートに従い、ロード処理を行う。

20

【0154】

図50におけるステップS138は、現在の再生時点がデータ管理テーブルにおけるアプリケーションqの生存区間であるか否かを示す判定である。もし生存区間でなければ、アプリケーションqはローカルメモリ29にロードすることができない。この場合、アプリケーションqを起動する旨の起動指示をJava仮想マシン38に発行し、ローカルメモリ29を介することなく、直接アプリケーションqをBD-ROMからワークメモリ37に読み出させる。この場合アプリケーションを読み出すためのヘッドシークが発生するから、PL再生は中断することになる(ステップS145)。

30

【0155】

もし生存区間であれば、ステップS139において、アプリケーションには読込属性が付加されているか否かを判定する。読込属性がないということは、アプリケーションqは、カールセル化、若しくはインターリーブ化されていないことを意味する。しかし読込属性が付加されていなくても、ローカルメモリ29にアプリケーションqを置くことは許される。そこで再生中断を承知の上、アプリケーションの読み出しを行う。つまりBD-ROMからローカルメモリ29へとアプリケーションを読み出した上で、アプリケーションをワークメモリ37に読み出す(ステップS140)。

【0156】

ステップS141～ステップS146は、ステップS139がYesと判定された場合になされる処理である。ステップS141では、読込属性を参照することで、アプリケーションがプリロードされているか否かを判定する。プリロードされていれば、ステップS135に移行する。

40

ステップS142は、読込属性がロードである場合に実行される判定ステップであり、アプリケーションqがカールセル化されているか、インターリーブ化されているかを判定する。インターリーブ化されていれば、キャッシュセンスをJava仮想マシン38に実行させる(ステップS143)。ローカルメモリ29にアプリケーションqが存在すれば、ステップS135に移行して、アプリケーションqをJava仮想マシン38にロードさせる。

【0157】

ローカルメモリ29にアプリケーションがなければ、トップメニュータイトルに分岐する等の例外処理を行う(ステップS144)。カールセル化されていれば、タイマをセット

50

し(ステップS 1 4 8)、そのタイマがタイムアウトするまで(ステップS 1 4 7)、キャッシュセンスをJava仮想マシン38に実行させる(ステップS 1 4 6)。もしローカルメモリ29にアプリケーションqが出現すれば、図49のステップS 1 3 5に移行して、アプリケーションqをJava仮想マシン38にロードさせる。タイムアウトすれば、トップメニュータイトルに分岐する等の例外処理を行う(ステップS 1 4 4)。

【0158】

図51は、Java仮想マシン38によるアプリケーションの読み込みがどのようにして行われるかを模式化した図である。

矢印1,2は、アプリケーション管理テーブルに生存していて、データ管理テーブルに生存しており、カーセル化、インターリーブ化を示す読込属性が存在するJavaアーカイブファイルの読み込みを示す。矢印1は、ステップS 6 5、6 7においてなされるローカルメモリ29センスを示す。このローカルメモリ29センスは、カーセル又はインターリーブ化により埋め込まれたデータが、ローカルメモリ29に存在するかもしれないためローカルメモリ29内をセンスするというものである。矢印2は、ステップS 1 3 5に対応する読み込みであり、アプリケーションがローカルメモリ29に存在していた場合の、ローカルメモリ29からワークメモリ37へのロードを示す。×付きの矢印は、ローカルメモリ29にデータがない場合を示す。

【0159】

矢印▽1,2は、アプリケーション管理テーブルに生存しているが、データ管理テーブルに生存しておらず、読込属性が存在しないJavaアーカイブファイルの読み込みを示す。

矢印▽1は、ステップS 1 4 5における読み込みに対応するものであり、Java仮想マシン38によるBD-ROMからのダイレクトリードの要求を示す。矢印▽2はその要求による、BD-ROMからワークメモリ37へのJavaアーカイブファイル読み出しを示す。

【0160】

矢印☆1,2,3は、アプリケーション管理テーブルに生存していて、データ管理テーブルに生存しているが、読込属性が存在しないJavaアーカイブファイルの読み込みを示す。

矢印☆1は、ステップS 1 4 0における読み込みに対応するものであり、Java仮想マシン38によるBD-ROMからのダイレクトリードの要求を示す。矢印☆2はその要求による、ローカルメモリ29へのJavaアーカイブファイルの読み出しを示す。矢印☆3はローカルメモリ29からワークメモリ37へのJavaアーカイブファイルの読み出しを示す。

【0161】

以上のように本実施形態によれば、ローカルメモリ29上で同時に常駐されるアプリケーションの数が所定数以下になるように規定しておくことができるので、ローカルメモリ29からの読み出し時におけるキャッシュミスを経力回避することができる。キャッシュミスのないアプリケーション読み出しを保証することができるので、アプリケーション呼出時にあては、AVClipの再生を止めてまで、BD-ROMからアプリケーションを読み出すことはなくなる。AVClip再生を途切れさせないので、AVClipのシームレス再生を保証することができる。

【0162】

(第7実施形態)

第3実施形態では、非AV系タイトルの時間軸をアプリケーションの生存区間に基づき定めることにした。しかしアプリケーションの動作というのは不安定であり、起動の失敗や異常終了がありうる。本実施形態は、起動失敗、異常終了があった場合のFail Safe機構を提案するものである。図52(a)は、第7実施形態に係るBD-Jオブジェクトの内部構成を示す図である。図7(b)と比較して本図が新規なのは、プレイリスト管理テーブルが追加されている点である。

【0163】

図52(b)は、プレイリスト管理テーブルの一例を示す図である。本図に示すようにプレイリスト管理テーブルは、PLの指定と、そのPLの再生属性とからなる。PLの指定は、対応するタイトルのタイトル時間軸において、再生可能となるPLを示す。PLの再生属性は

10

20

30

40

50

、指定されたPLを、タイトル再生の開始と同時に自動再生するか否かを示す(こうして自動再生されるPLをデフォルトPLという)。

【0164】

次にプレイリスト管理テーブルによりタイトル時間軸がどのように規定されるかを、図53を参照しながら説明する。図53(a)は、再生属性が非自動再生を示すよう設定された場合の非AV系タイトルにおけるタイトル時間軸を示す図である。この場合、デフォルトPLは再生されないから、非AV系タイトル同様、アプリケーションの生存区間からタイトル時間軸が定まる。

【0165】

図53(b)は、再生属性がAutoPlayに設定された非AV系タイトルのタイトル時間軸を示す図である。再生属性がAutoPlayを示すよう設定されれば、Playback Control Engine 32は非AV系タイトルの再生開始と同時に、デフォルトPLの再生を開始する。しかしアプリケーションが正常に動作し、正常終了したとしても、このタイトル時間軸は、PL時間軸を基準にして定められる。

【0166】

図53(c)は、プレイリスト管理テーブルにおいて再生属性が“AutoPlay”を示すよう設定され、アプリケーションが異常終了した場合を示す。かかる異常終了により、どのアプリケーションも動作していない状態になるが、デフォルトPLの再生は継続する。この場合も、デフォルトPLのPL時間軸がタイトル時間軸になる。

図53(d)は、プレイリスト管理テーブルにおいて再生属性が“AutoPlay”を示すよう設定され、メインアプリの起動に失敗したケースを示す。この場合も、Playback Control Engine 32によるデフォルトPL再生は、アプリケーションの起動失敗とは関係なしに行われるので、デフォルトPLの時間軸がタイトル時間軸になる。

【0167】

以上のようにプレイリスト管理テーブルの再生属性を、“AutoPlay”に設定しておけば、Javaアプリケーションの起動に、5~10秒という時間がかかったとしても、その起動がなされている間、“とりあえず何かが写っている状態”になる。この“とりあえず何かが写っている状態”によりタイトル実行開始時のスタートアップディレイを補うことができる。

以上は本実施形態における記録媒体に対する改良である。続いて本実施形態における再生装置に対する改良について説明する。

【0168】

図52(c)は、分岐先タイトルのプレイリスト管理テーブルにおいて、再生属性がAutoPlayに設定されたPLが存在する場合、再生装置がどのような処理を行うかを示す図である。本図に示すように、再生属性がAutoPlayに設定されたPLが、分岐先タイトルのプレイリスト管理テーブルに存在すれば、BD-Jモジュール35内のアプリケーションマネージャ36は、タイトル分岐直後にこのAutoPlayPLの再生を開始するようPlayback Control Engine 32に指示する。このように再生属性がAutoPlayのPLは、タイトル分岐直後に再生開始が命じられることになる。

【0169】

上述した記録媒体の改良に対応するため、アプリケーションマネージャ36は図54に示すような処理手順で処理を行う。

図54は、第7実施形態に係るアプリケーションマネージャ36の処理手順を示すフローチャートである。本フローチャートは、図38のフローチャートにおいてステップS21の前にステップS103、ステップS104を追加し、ステップS21と、ステップS22との間にステップS100を追加し、ステップS23ーステップS26間に、ステップS105を追加したものである。

【0170】

ステップS103は、対応するタイトルのプレイリスト管理テーブルの再生属性がAutoPlayであるか否かの判定である。もしAutoPlayなら、デフォルトPLに対する再生制御をPlayback Control Engine 32に開始させる(ステップS104)。

10

20

30

40

50

ステップS100は、Presentation Engine31による再生中であるか否かを判定する。もし再生中であるなら、ステップS101に移行する。

【0171】

ステップS105は、ステップS23がYes、ステップS25がNoである場合に実行される判定ステップであり、再生属性がAutoPlayであるか否かを示す。もし否であるなら、タイトル終了をモジュールマネージャ34に通知する。もしAutoPlayであるなら、ステップS101に移行して、処理を継続する。

図55は、プレイリスト管理テーブルにおいて“再生属性=AutoPlay”に設定されることにより、どのような再生が行われるかを模式化した図である。ここで再生すべきタイトルは、落下するタイル片を積み重ねるというゲームアプリを含む非AV系タイトルである。この非AV系タイトルにおいて、プレイリスト管理テーブルの再生属性がAutoPlayに設定されていれば、Playback Control Engine32によるデフォルトPL再生も開始する。ゲームアプリの実行と、デフォルトPL再生とが並列的になされるので、図55の上段の左側に示すように、前景をゲームアプリの画面とし、背景をデフォルトPLの再生画像とした合成画像が表示されることになる。このゲームアプリは途中で異常終了したとする。ゲームアプリはアプリケーションマネージャ36により強制終了させられるが、デフォルトPLの再生が継続してなされるため、タイトルは、何かが写っている状態になる。このようなプレイリスト管理テーブルにおける再生属性の指定により、非AV系タイトル内のゲームアプリが異常終了した場合でも、ハングアップやブラックアウトがない動作を維持することができる。

【0172】

(第8実施形態)

第1実施形態においてBD-Jオブジェクトは、データ管理テーブル、アプリケーション管理テーブルという2つのテーブルを具備していたが、本実施形態は、これらを1つのテーブルに統合するという形態を開示する。かかる統合にあたって、図56(a)に示すように、データ管理テーブルにおける読込属性という項目を廃し、代わりに起動属性にReady属性という属性を設ける。Ready属性とは、他のアプリケーションからの呼出又はアプリケーションマネージャ36からの呼出に備えて、ローカルメモリ29に予めアプリケーションをロードしておく旨を示す起動属性の類型である。

【0173】

図56(b)は、アプリケーションの扱いと、起動属性との関係を示した図である。第1実施形態に示したようにアプリケーションの扱いには、プリロードされるか否か(1)、現在の再生時点が有効区間に到来した際自動的に起動されるか、他からの呼出に応じて起動されるか(2)、タイトル再生進行に従ってロードされるか(3)、生存しているかという違いがあり、これらの違いにより、図56(b)に示すような5つの態様が出現する。このうち起動属性がAutoRunに設定されるのは、プリロードがなされ、“自動起動”である場合、及び、ロードがなされ、“自動起動”である場合である。

【0174】

一方、起動属性がReady属性に設定されるのは、プリロード、又は、ロードがなされ、起動項目が“呼出起動”を示している場合である。

尚、ワークメモリ37では生存しているが、ローカルメモリ29にはロードされない”との類型が存在し得ない。これは、アプリケーション・データ管理テーブルでは、ワークメモリ37の生存区間と、ローカルメモリ29の生存区間とが一体だからである。

【0175】

起動属性として、このReady属性を追加されたので、アプリケーションマネージャ36はタイトル再生に先立ち、起動属性がAutoRunに設定されたアプリケーション、及び、起動属性がReady属性に設定されたアプリケーションをローカルメモリ29にプリロードするとの処理を行う。こうすることにより、読込属性を設けなくても、アプリケーションをローカルメモリ29にプリロードしておくとの処理が可能になる。

【0176】

図57は、第8実施形態に係るJava仮想マシン38によるアプリケーションの読み込みがどのようにして行われるかを模式化した図である。本図における読み込みは、図51をベースにして作図している。

矢印1,2は、アプリケーション・データ管理テーブルに生存していて、起動属性がReady属性に設定されているJavaアーカイブファイルの読み込みを示す。

【0177】

矢印☆1,2,3は、アプリケーション・データ管理テーブルに生存していおり、起動属性がPersistentであるアプリケーションの読み込みを示す。

これらの矢印1,2、矢印☆1,2,3は、図51でも記述されていたものだが、図51に記述していた、▽1,2の矢印に該当する読み込みは、図57では存在しない。これは、アプリケーション・データ管理テーブルは、アプリケーション管理テーブル、データ管理テーブルを一体化したものであるため、アプリケーション管理テーブル=生存、データ管理テーブル=非存在という組合せは表現し得ないからである。

【0178】

以上のように本実施形態によれば、データ管理テーブル、アプリケーション管理テーブルを1つのテーブル(アプリケーション・データ管理テーブル)にまとめることができるので、アプリケーションマネージャ36による処理を簡略化することができる。尚、読込優先度をなくすことによりアプリケーション・データ管理テーブルをより簡略化にしても良い。

【0179】

(第9実施形態)

第1実施形態では、アプリケーションをローカルメモリ29に読み込むにあたって、読込優先度を参照して、この読込優先度に従い、読み込み処理に優劣を与えた。これに対し第9実施形態は、Optionalを意味する情報と、0から255までの数値との組合せにより読込優先度を表す実施形態である。

【0180】

図58(a)(b)は、第9実施形態に係る読込優先度の一例を示す図である。255、128は、0から255までの読込優先度の一例であり、本例におけるapplication#2は、application#3より読込優先度が高いことを意味する。

本実施形態においてアプリケーションマネージャ36は、第1実施形態同様、先ずMandatoryを示す読込優先度が付与されたアプリケーションをローカルメモリ29に読み込む。

【0181】

その後、Optionalを示す読込優先度が付与されたアプリケーションに対しては、ローカルメモリ29における容量が、アプリケーションのサイズを上回るか否かを判定する。もし上回るなら、読込優先度=Optionalが付与されたアプリケーションをそのままローカルメモリ29に読み込む。もし下回るなら、アプリケーションを構成するデータのうち、読込優先度を表す数値が高いアプリケーションをローカルメモリ29に読み込む。そして、ローカルメモリ29における残りの領域に、読込優先度を表す数値が低いアプリケーションを読み出す。

【0182】

こうすることでOptional扱いのアプリケーションについては、全体を格納する容量が再生装置のローカルメモリ29になくても、その一部分をローカルメモリ29に格納しておくことができる。

(第10実施形態)

第1実施形態においてアプリケーションマネージャ36は、同じapplicationIDが付与されたアプリケーションを、読込優先度に従い排他的にローカルメモリ29にロードするとしたが、第10実施形態は、アプリケーションにグループ属性を与えることにより、排他的なロードを実現する。図59は、グループ属性が付与されたデータ管理テーブルを示す図である。グループ属性には、排他グループなし、排他グループあり、といった、2通

りの設定が可能であり、排他グループありの場合、そのグループ番号が記述される。図59(a)におけるapplication#1の「-」は、排他グループが存在しないことを示す。一方、application#2,#3の「group#1」は、排他グループがあり、application#2,#3は、group#1という排他グループに帰属していることを示す。以上が本実施形態に係る記録媒体の改良である。

【0183】

本実施形態に係る再生装置は、データ管理テーブルに基づいて各アプリケーションをローカルメモリ29に読み込んだ後、ローカルメモリ29のアプリケーションにおけるグループ属性をベリファイする。同じ排他グループに帰属するアプリケーションが、ローカルメモリ29上に2つ以上存在していれば、そのうち一方をローカルメモリ29から削除する。

【0184】

こうすることにより、ローカルメモリ29の利用効率を向上させることができる。排他グループの具体例としては、ランチャーアプリと、このアプリにより起動されるアプリとからなるグループが相応しい。本アプリケーションにより起動されるアプリケーションは、原則1つに限られるので、ローカルメモリ29には、ランチャー+1個のアプリケーションのみが存在する筈である。もし3つ以上のアプリケーションが存在していれば、これをローカルメモリ29から削除するという処理をアプリケーションマネージャ36は行う必要があるので、各アプリケーションのグループ属性を設け、ローカルメモリ29上で存在するアプリケーションがランチャー+1個のアプリケーションになっているかどうかのチェックを行うのである。

【0185】

図59(a)は、アプリケーション管理テーブルに基づくローカルメモリ29に対するアクセスを示す図である。本図において、読込優先度=Optionalと設定されたapplication#2、application#3のグループ属性は、group#1であるので、これらのアプリケーションは、同じ排他グループに属することになる。3つのアプリケーションのうち、application#1は上述したランチャーアプリケーションであり、application#2、application#3は、これにより起動されるアプリケーションであるので、どちらかのみがローカルメモリ29上に存在するよう、グループ属性が付与されている。アプリケーションマネージャ36は、これらapplication#2、application#3のグループ属性を参照して、どちらか1つをローカルメモリ29から削除するとの処理を行う。かかる削除によりローカルメモリ29に余白が生まれる。

【0186】

(第11実施形態)

第1実施形態では、アプリケーション管理テーブルをタイトル毎に持たせるとしたが、本実施形態では、このアプリケーション管理テーブルの割当単位を変更させることを提案する。図60は、割当単位のバリエーションを示す図である。本図において第1段目は、BD-ROMに記録されている3つのアプリケーション管理テーブルを示し、第2段目は、タイトル単位、第3段目は、ディスク単位、第4段目は、複数BD-ROMからなるディスクセット単位を示す。図中の矢印は、アプリケーション管理テーブルの割り当てを模式化して示している。この矢印を参照すると、第1段目におけるアプリケーション管理テーブル#1,#2,#3のそれぞれは、第2段目に示したtitle#1,#2,#3のそれぞれに割り当てられていることがわかる。また、ディスク単位ではアプリケーション管理テーブル#4が割り当てられており、ディスクセット全体に対してはアプリケーション管理テーブル#5が割り当てられている。このようにアプリケーション管理テーブルの割当単位を、タイトルより大きい単位にすることにより、1つのBD-ROMがローディングされている間、生存するようなアプリケーションや複数BD-ROMのうちどれかがローディングされている間、生存するようなアプリケーションを定義することができる。

【0187】

(備考)

10

20

30

40

50

以上の説明は、本発明の全ての実施行為の形態を示している訳ではない。下記(A)(B)(C)(D)・・・の変更を施した実施行為の形態によっても、本発明の実施は可能となる。本願の請求項に係る各発明は、以上に記載した複数の実施形態及びそれらの変形形態を拡張した記載、ないし、一般化した記載としている。拡張ないし一般化の程度は、本発明の[技術分野]の、出願当時の技術水準の特性に基づく。

【0188】

(A)全ての実施形態では、本発明に係る光ディスクをBD-ROMとして実施したが、本発明の光ディスクは、記録される動的シナリオ、Index Tableに特徴があり、この特徴は、BD-ROMの物理的性質に依存するものではない。動的シナリオ、Index Tableを記録しうる記録媒体なら、どのような記録媒体であってもよい。例えば、DVD-ROM, DVD-RAM, DVD-RW, DVD-R, DVD+RW, DVD+R, CD-R, CD-RW等の光ディスク、PD, MO等の光磁気ディスクであってもよい。また、コンパクトフラッシュカード、スマートメディア、メモリスティック、マルチメディアカード、PCM-CIAカード等の半導体メモリカードであってもよい。フレキシブルディスク、SuperDisk, Zip, Clik!等の磁気記録ディスク(i)、ORB, Jaz, SparQ, SyJet, EZFley, マイクロドライブ等のリムーバブルハードディスクドライブ(ii)であってもよい。更に、機器内蔵型のハードディスクであってもよい。

【0189】

(B) 全ての実施形態における再生装置は、BD-ROMに記録されたAVClipをデコードした上でTVに出力していたが、再生装置をBD-ROMドライブのみとし、これ以外の構成要素をTVに具備させてもよい、この場合、再生装置と、TVとをIEEE1394で接続されたホームネットワークに組み入れることができる。また、実施形態における再生装置は、テレビと接続して利用されるタイプであったが、ディスプレイと一体型となった再生装置であってもよい。更に、各実施形態の再生装置において、処理の本質的部分をなす部分のみを、再生装置としてもよい。これらの再生装置は、何れも本願明細書に記載された発明であるから、これらの何れの態様であろうとも、各実施形態に示した再生装置の内部構成を元に、再生装置を製造する行為は、本願の明細書に記載された発明の実施行為になる。各実施形態に示した再生装置の有償・無償による譲渡(有償の場合は販売、無償の場合は贈与になる)、貸与、輸入する行為も、本発明の実施行為である。店頭展示、カタログ勧誘、パンフレット配布により、これらの譲渡や貸渡を、一般ユーザに申し出る行為も本再生装置の実施行為である。

【0190】

(C)各フローチャートに示したプログラムによる情報処理は、ハードウェア資源を用いて具体的に実現されていることから、上記フローチャートに処理手順を示したプログラムは、単体で発明として成立する。全ての実施形態は、再生装置に組み込まれた態様で、本発明に係るプログラムの実施行為についての実施形態を示したが、再生装置から分離して、各実施形態に示したプログラム単体を実施してもよい。プログラム単体の実施行為には、これらのプログラムを生産する行為(1)や、有償・無償によりプログラムを譲渡する行為(2)、貸与する行為(3)、輸入する行為(4)、双方向の電子通信回線を介して公衆に提供する行為(5)、店頭展示、カタログ勧誘、パンフレット配布により、プログラムの譲渡や貸渡を、一般ユーザに申し出る行為(6)がある。

【0191】

(D)各フローチャートにおいて時系列に実行される各ステップの「時」の要素を、発明を特定するための必須の事項と考える。そうすると、これらのフローチャートによる処理手順は、再生方法の使用形態を開示していることがわかる。各ステップの処理を、時系列に行うことで、本発明の本来の目的を達成し、作用及び効果を奏するよう、これらのフローチャートの処理を行うのであれば、本発明に係る記録方法の実施行為に該当することはいうまでもない。

【0192】

(E)Chapterを一覧表示するためのMenu(Chapter Menu)と、この挙動を制御するMOVIEオブジェクトとをBD-ROMに記録しておき、Top Menuから分岐できるようにしてもよい。ま

たりリモコンキーのChapterキーの押下により呼出されるようにしてもよい。

(F)BD-ROMに記録するにあたって、AVClipを構成する各TSパケットには、拡張ヘッダを付与しておくことが望ましい。拡張ヘッダは、TP_extra_headerと呼ばれ、『Arrival_Time_Stamp』と、『copy_permission_indicator』とを含み4バイトのデータ長を有する。TP_extra_header付きTSパケット(以下EX付きTSパケットと略す)は、32個毎にグループ化されて、3つのセクタに書き込まれる。32個のEX付きTSパケットからなるグループは、6144バイト(=32×192)であり、これは3個のセクタサイズ6144バイト(=2048×3)と一致する。3個のセクタに収められた32個のEX付きTSパケットを“Aligned Unit”という。

【0193】

IEEE1394を介して接続されたホームネットワークでの利用時において、再生装置200は、以下のような送信処理にてAligned Unitの送信を行う。つまり送り手側の機器は、Aligned Unitに含まれる32個のEX付きTSパケットのそれぞれからTP_extra_headerを取り外し、TSパケット本体をDTCP規格に基づき暗号化して出力する。TSパケットの出力にあたっては、TSパケット間の随所に、isochronousパケットを挿入する。この挿入箇所は、TP_extra_headerのArrival_Time_Stampに示される時刻に基づいた位置である。TSパケットの出力に伴い、再生装置200はDTCP_Descriptorを出力する。DTCP_Descriptorは、TP_extra_headerにおけるコピー許否設定を示す。ここで「コピー禁止」を示すようDTCP_Descriptorを記述しておけば、IEEE1394を介して接続されたホームネットワークでの利用時においてTSパケットは、他の機器に記録されることはない。

【0194】

(G)各実施形態において、記録媒体に記録されるデジタルストリームはAVClipであったが、DVD-Video規格、DVD-Video Recording規格のVOB(Video Object)であってもよい。VOBは、ビデオストリーム、オーディオストリームを多重化することにより得られたISO/IEC13818-1規格準拠のプログラムストリームである。またAVClipにおけるビデオストリームは、MPEG4やWMV方式であってもよい。更にオーディオストリームは、Linear-PCM方式、Dolby-AC3方式、MP3方式、MPEG-AAC方式、Dts、WMA(Windows media audio)であってもよい。

【0195】

(H)各実施形態における映像作品は、アナログ放送で放送されたアナログ映像信号をエンコードすることにより得られたものでもよい。デジタル放送で放送されたトランスポートストリームから構成されるストリームデータであってもよい。

またビデオテープに記録されているアナログ/デジタルの映像信号をエンコードしてコンテンツを得ても良い。更にビデオカメラから直接取り込んだアナログ/デジタルの映像信号をエンコードしてコンテンツを得ても良い。他にも、配信サーバにより配信されるデジタル著作物でもよい。

【0196】

(I)BD-Jモジュール35は、衛星放送受信のために機器に組み込まれたJavaプラットフォームであってもよい。BD-Jモジュール35がかかるJavaプラットフォームであれば、本発明に係る再生装置は、MHP用STBとしての処理を兼用することになる。

更に携帯電話の処理制御のために機器に組み込まれたJavaプラットフォームであってもよい。かかるBD-Jモジュール35がかかるJavaプラットフォームであれば、本発明に係る再生装置は、携帯電話としての処理を兼用することになる。

【0197】

(J)レイアモデルにおいて、BD-Jモードの上にMOVIEモードを配置してもよい。特にMOVIEモードでの動的シナリオの解釈や、動的シナリオに基づく制御手順の実行は、再生装置に対する負担が軽いので、MOVIEモードをBD-Jモード上で実行させても何等問題は生じないからである。また再生装置や映画作品の開発にあたって、動作保証が1つのモードで済むからである。

【0198】

更にBD-Jモードだけで再生処理を実行してもよい。第5実施形態に示したように、BD-JモードでもPLの再生と同期した再生制御が可能になるから、強いてMOVIEモードを設けな

くてもよいという理由による。

(K)AVClipに多重化されるべきインタラクティブグラフィクスストリームにナビゲーションコマンドを設けて、あるPLから別のPLへの分岐を実現しても良い。

【産業上の利用可能性】

【0199】

本発明に係る再生装置は、ホームシアターシステムでの利用のように、個人的な用途で利用されることがありうる。しかし本発明は上記実施形態に内部構成が開示されており、この内部構成に基づき量産することが明らかなので、資質において工業上利用することができる。このことから本発明に係る再生装置は、産業上の利用可能性を有する。

【図面の簡単な説明】

【0200】

【図1】 本発明に係る再生装置の使用行為についての形態を示す図である。

【図2】 BD-ROMにおけるファイル・ディレクトリ構成を示す図である。

【図3】 AVClip時間軸と、PL時間軸との関係を示す図である。

【図4】 4つのClip_Information_file_nameによりなされた一括指定を示す図である。

【図5】 PLmarkによるチャプター定義を示す図である。

【図6】 SubPlayItem時間軸上の再生区間定義と、同期指定とを示す図である。

【図7】 (a) Movieオブジェクトの内部構成を示す図である。

【0201】

(b) BD-Jオブジェクトの内部構成を示す図である。

(c) Javaアプリケーションの内部構成を示す図である。

【図8】 (a) Javaアーカイブファイルに収められているプログラム、データを示す図である。(b) xletプログラムの一例を示す図である。

【図9】 (a) トップメニュー、title#1、title#2といった一連のタイトルを示す図である。

【0202】

(b) Playlist#1、Playlist#2の時間軸を足し合わせた時間軸を示す図である。

【図10】 本編タイトル、オンラインショッピングタイトル、ゲームタイトルという3つのタイトルを含むディスクコンテンツを示す図である。

【図11】 図10に示した3つのタイトルの再生画像の一例を示す図である。

【図12】 (a) 図10の破線に示される帰属関係から各アプリケーションの生存区間をグラフ化した図である。

【0203】

(b) 図12(a)の生存区間を規定するため、記述されたアプリケーション管理テーブルの一例を示す図である。

【図13】 (a) 起動属性設定の一例を示す図である。(b) 他のアプリケーションからのアプリケーション呼出があつて初めて起動するアプリケーション(application#2)を示す図である。

【図14】 (a) (b) Suspendが有意義となるアプリケーション管理テーブル、生存区間の一例を示す図である。

【図15】 起動属性がとり得る三態様(Persistent、AutoRun、Suspend)と、直前タイトルにおけるアプリケーション状態の三態様(非起動、起動中、Suspend)とがとりうる組合せを示す図である。

【図16】 本発明に係る再生装置の内部構成を示す図である。

【図17】 (a) BD-ROMに存在しているJavaアーカイブファイルを、ローカルメモリ29上でどのように識別するかを示す図である。

【0204】

(b) 図17(a)の応用を示す図である。

【図18】 ROM24に格納されたソフトウェアと、ハードウェアとからなる部分を、レイア構成に置き換えて描いた図である。

10

20

30

40

50

【図 19】 Presentation Engine 3 1 ~ モジュールマネージャ 3 4 による処理を模式化した図である。

【図 20】 アプリケーションマネージャ 3 6 による処理を模式化した図である。

【図 21】 ワークメモリ 3 7 ~ Default Operation Manager 4 0 を示す図である。

【図 22】 アプリケーションマネージャ 3 6 による分岐時の制御手順を示す図である。

【図 23】 アプリケーション終了処理の処理手順を示すフローチャートである。

【図 24】 アプリケーション終了の過程を模式的に示した図である。

【図 25】 (a) PL 時間軸上に生存区間を定めたアプリケーション管理テーブルを示す図である。

【0205】

(b) 図 25 (a) のアプリケーション管理テーブルに基づき、アプリケーションの生存区間を示した図である。

【図 26】 (a) PL 時間軸から定まるタイトル時間軸を示す。(b) メインとなるアプリケーションの生存区間から定まるタイトル時間軸を示す。(c) 複数アプリケーションの生存区間から定まるタイトル時間軸を示す図である。

【図 27】 タイトル再生時におけるアプリケーションマネージャ 3 6 の処理手順を示すフローチャートである。

【図 28】 (a) BD-ROM により実現されるメニュー階層を示す図である。

【0206】

(b) メニュー階層を実現するための MOVIE オブジェクトを示す図である。

【図 29】 Index Table と、Index Table から各 Movie オブジェクトへの分岐とを模式化した図である。

【図 30】 (a) 図 29 (b) のように Index Table が記述された場合における分岐を示す。

【0207】

(b) 非 AV 系タイトルが強制終了した際における分岐を示す図である。

【図 31】 モジュールマネージャ 3 4 の処理手順を示すフローチャートである。

【図 32】 アプリケーションマネージャ 3 6 によるアプリケーション強制終了の動作例を示す図である。

【図 33】 Playback Control Engine 3 2 による PL 再生手順を示すフローチャートである

。【図 34】 アングル切替、SkipBack, SkipNext の受付手順を示すフローチャートである。

【図 35】 SkipBack, SkipNext API がコールされた際の処理手順を示すフローチャートである。

【図 36】 Presentation Engine 3 1 による処理手順の詳細を示すフローチャートである

。【図 37】 SubPlayItem の再生手順を示すフローチャートである。

【図 38】 第 5 実施形態に係るアプリケーションマネージャ 3 6 の処理手順を示すフローチャートである。

【図 39】 データ管理テーブルの一例を示す図である。

【図 40】 BD-J オブジェクトが想定している実行モデルを示す図である。

【図 41】 (a) ローカルメモリ 2 9 における Java アーカイブファイル生存を示す生存区間を示す図である。

【0208】

(b) 図 41 (a) での Java アーカイブファイル生存区間を規定するため、記述されたデータ管理テーブルを示す図である。

【図 42】 カラーセル化による Java アーカイブファイル埋め込みを示す図である。

【図 43】 (a) インターリーブ化による AVClip 埋め込みを示す図である。

【0209】

(b) 読込属性の 3 つの類型を示す図である。

10

20

30

40

50

【図44】(a) データ管理テーブルの一例を示す図である。(b) 図44(a)のデータ管理テーブルの割り当てによるローカルメモリ29の格納内容の変遷を示す図である。

【図45】(a) 新旧再生装置におけるローカルメモリ29のメモリ規模を対比して示す図である。

【0210】

(b) 読込優先度が設定されたデータ管理テーブルの一例を示す図である。

【図46】アプリケーションマネージャ36によるプリロード制御の処理手順を示す図である。

【図47】(a) applicationIDが同一であるが、読込優先度は互いに異なる複数のアプリケーションを規定するデータ管理テーブルの一例を示す図である。

【0211】

(b) 図47(a)のデータ管理テーブルの割り当てによるローカルメモリ29の格納内容の変遷を示す図である。

【図48】(a) プリロードされるべきアプリケーション、ロードされるべきアプリケーションに同一のapplicationIDを付与するよう記述されたデータ管理テーブルの一例を示す図である。

【0212】

(b) メモリ規模が小さい再生装置におけるローカルメモリ29の格納内容の変遷を示す図である。

(c) メモリ規模が大きい再生装置におけるローカルメモリ29の格納内容の変遷を示す図である。

【図49】データ管理テーブルに基づくアプリケーションマネージャ36によるロード処理の処理手順を示す図である。

【図50】アプリケーションqの生存区間に、現在の再生時点が到達した場合のアプリケーションマネージャ36による処理手順を示す図である。

【図51】Java仮想マシン38によるアプリケーションの読み込みがどのようにして行われるかを模式化した図である。

【図52】(a) 第7実施形態に係るBD-Jオブジェクトの内部構成を示す図である。

【0213】

(b) プレイリスト管理テーブルの一例を示す図である。

(c) 分岐先タイトルのプレイリスト管理テーブルにおいて、再生属性がAutoPlayに設定されたPLが存在する場合、再生装置がどのような処理を行うかを示す図である。

【図53】(a) 再生属性が非自動再生を示すよう設定された場合の非AV系タイトルにおけるタイトル時間軸を示す図である。

【0214】

(b) 再生属性がAutoPlayに設定された非AV系タイトルのタイトル時間軸を示す図である。

(c) プレイリスト管理テーブルにおいて再生属性が“AutoPlay”を示すよう設定され、アプリケーションが強制終了した場合を示す図である。

(d) プレイリスト管理テーブルにおいて再生属性が“AutoPlay”を示すよう設定され、メインアプリの起動に失敗したケースを示す図である。

【図54】第7実施形態に係るアプリケーションマネージャ36の処理手順を示すフローチャートである。

【図55】プレイリスト管理テーブルにおいて“再生属性=AutoPlay”に設定されることにより、どのような再生が行われるかを模式化した図である。

【図56】(a) (b) アプリケーションの扱いと、起動属性との関係を示した図である。

【図57】第8実施形態に係るJava仮想マシン38によるアプリケーションの読み込みがどのようにして行われるかを模式化した図である。

【図58】 (a) (b) 第9実施形態に係る読込優先度の一例を示す図である。

【図59】 (a) グループ属性が付与されたデータ管理テーブルを示す図である。

【0215】

(b) アプリケーション管理テーブルに基づくローカルメモリ29に対するアクセスを示す図である。

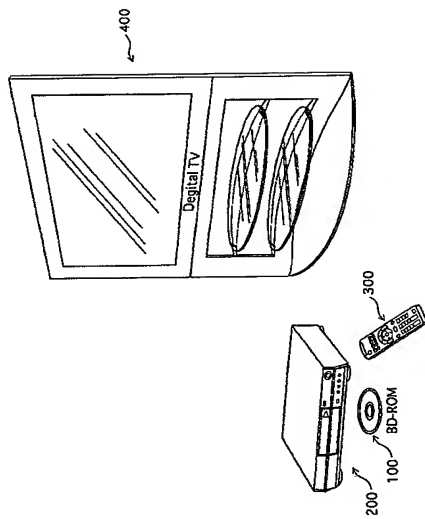
【図60】 アプリケーション管理テーブルの割当単位のバリエーションを示す図である。

【符号の説明】

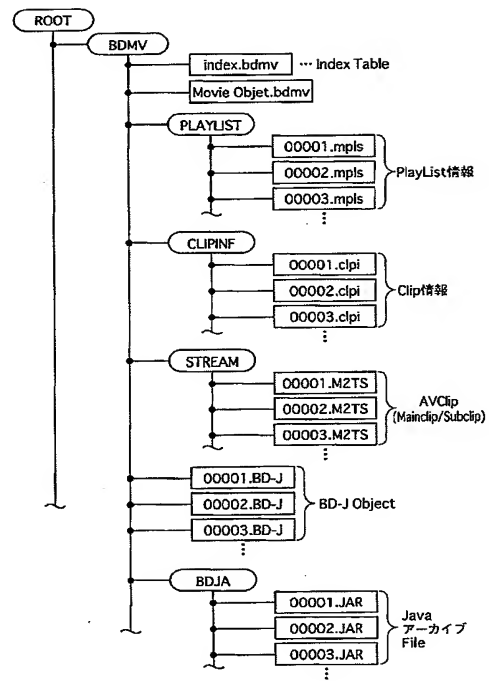
【0216】

- | | |
|------------------------------|----|
| 1 BD-ROMドライブ | |
| 2 リードバッファ | 10 |
| 3 デマルチプレクサ | |
| 4 ビデオデコーダ | |
| 5 ビデオプレーン | |
| 9 P-Graphicsデコーダ | |
| 10 Presentation Graphicsプレーン | |
| 11 合成部 | |
| 12 フォントゼネレータ | |
| 13 I-Graphicsデコーダ | |
| 14 スイッチ | |
| 15 Interactive Graphicsプレーン | 20 |
| 16 合成部 | |
| 17 HDD | |
| 18 リードバッファ | |
| 19 デマルチプレクサ | |
| 20 オーディオデコーダ | |
| 21 シナリオメモリ | |
| 22 CPU | |
| 23 キーイベント処理部 | |
| 24 命令ROM | |
| 25 スイッチ | 30 |
| 26 CLUT部 | |
| 27 CLUT部 | |
| 28 PSRセット | |
| 29 ローカルメモリ | |
| 31 Presentation Engine | |
| 32 再生制御エンジン | |
| 33 HDMVモジュール | |
| 34 モジュールマネージャ | |
| 36 アプリケーションマネージャ | |
| 37 ワークメモリ | 40 |
| 38 Java仮想マシン | |
| 39 Event Listener Manager | |
| 40 Default Operation Manage | |

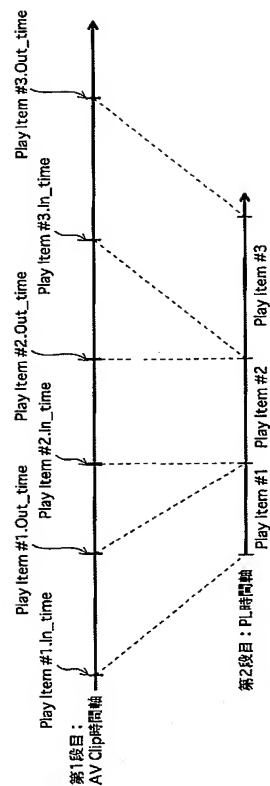
【図 1】



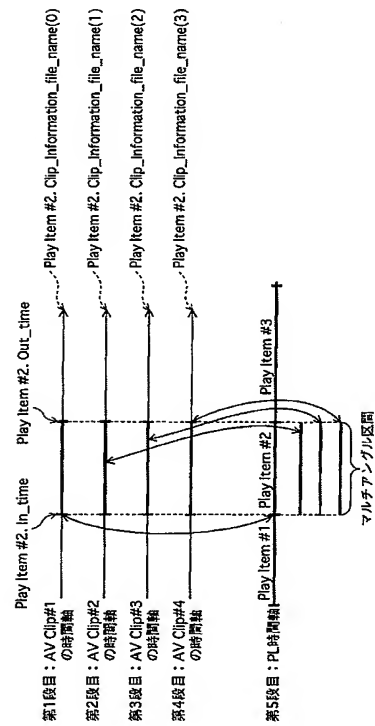
【図 2】



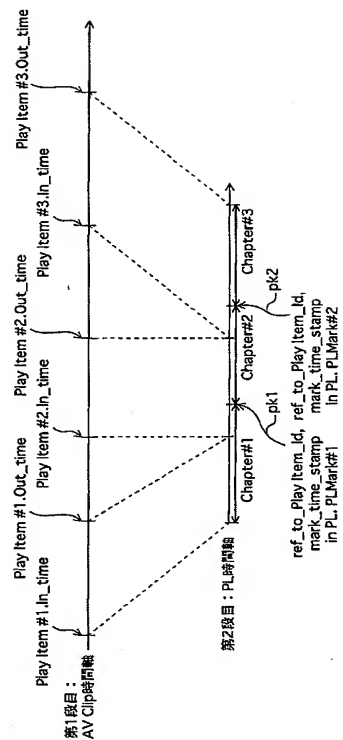
【図 3】



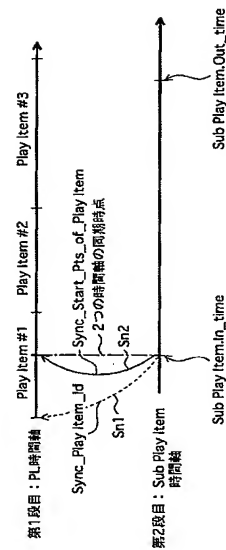
【図 4】



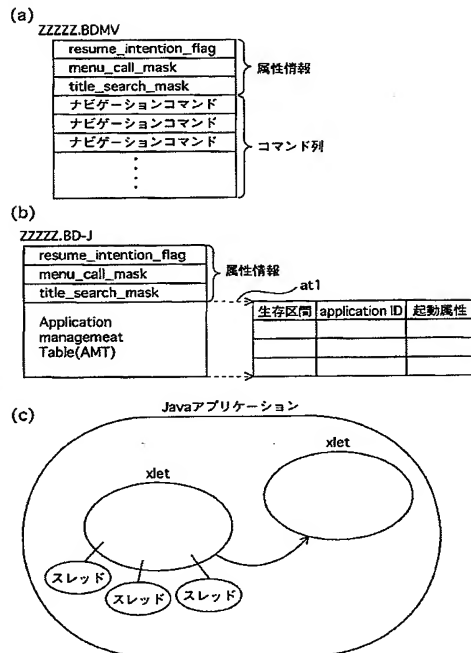
【図5】



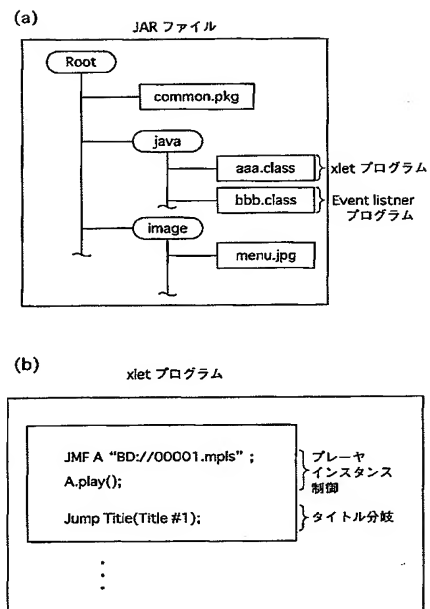
【図6】



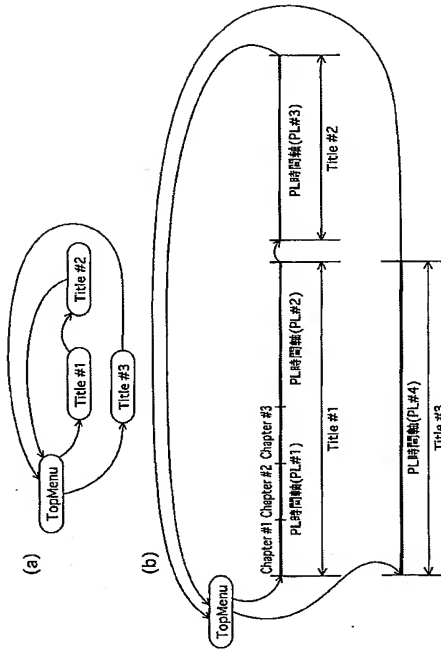
【図7】



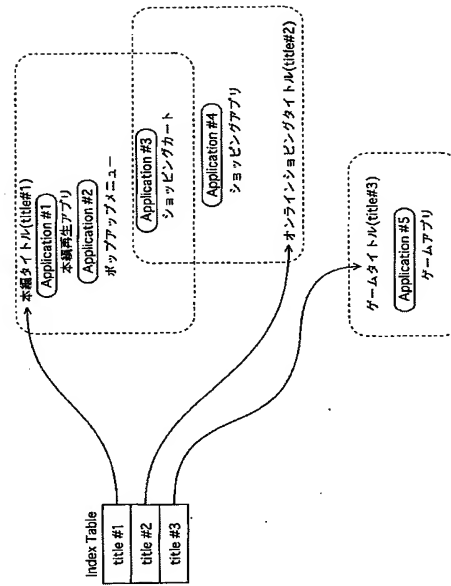
【図8】



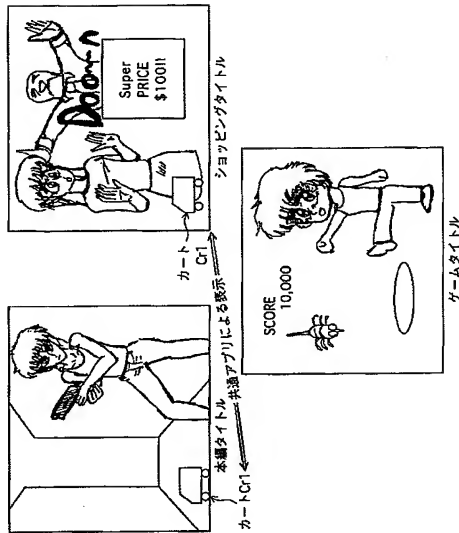
【図 9】



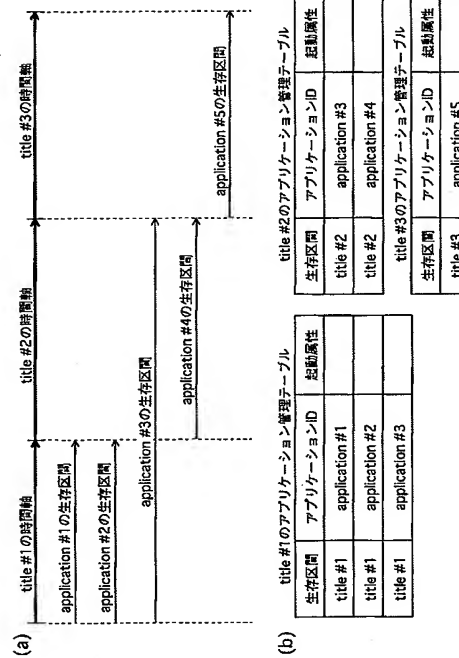
【図 10】



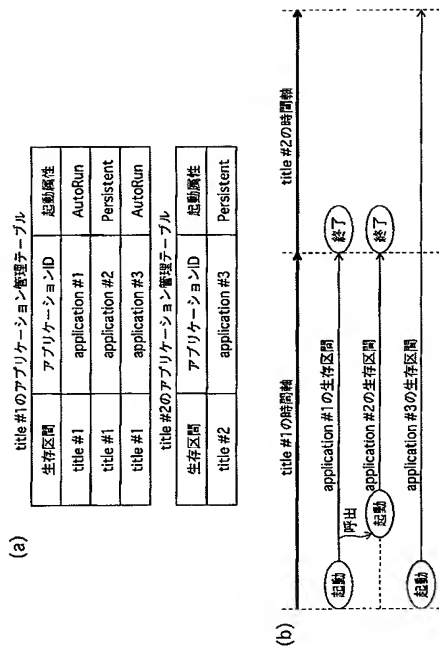
【図 11】



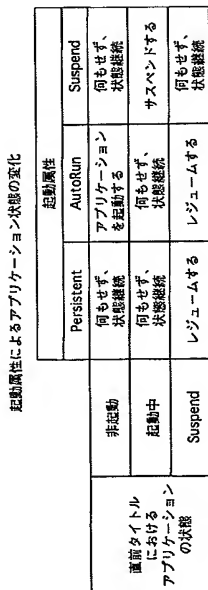
【図 12】



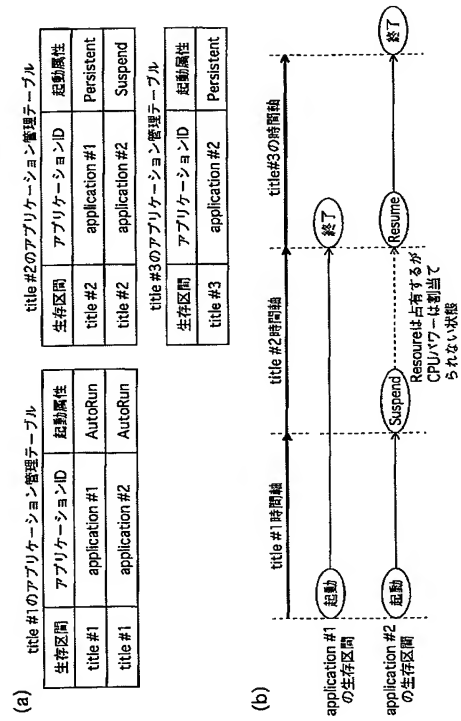
【図 13】



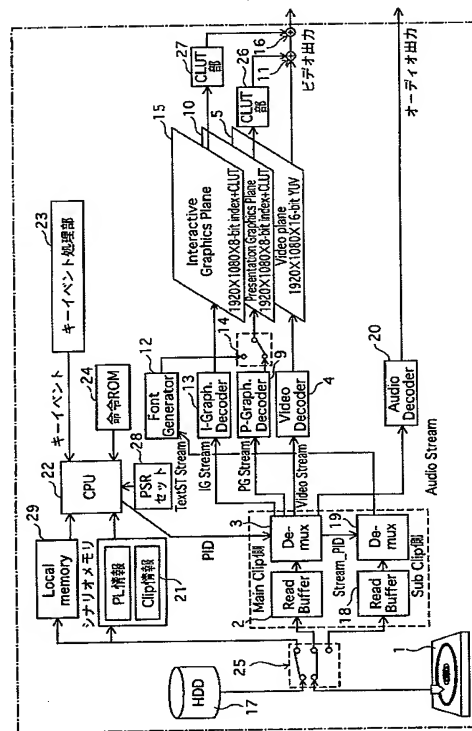
【図 15】



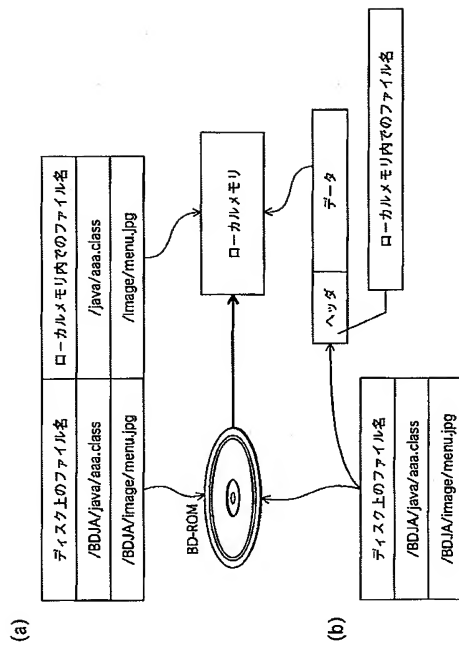
【図 14】



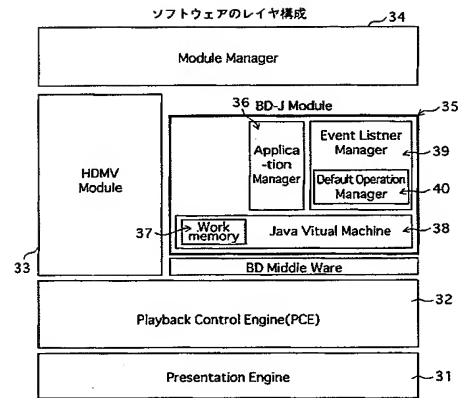
【図 16】



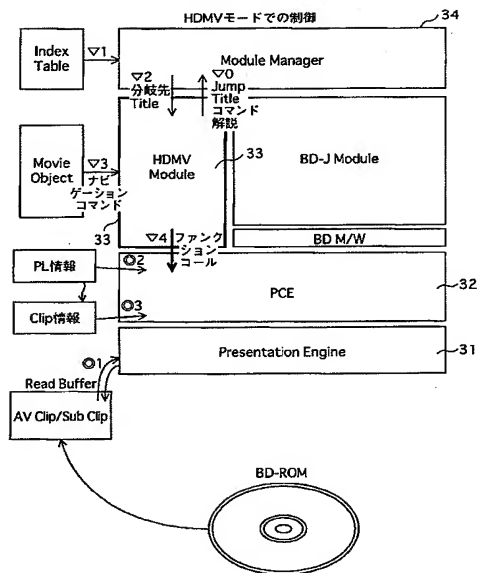
【図 17】



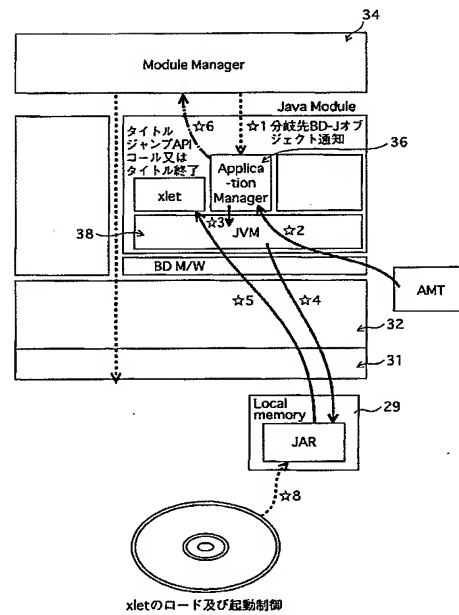
【図 18】



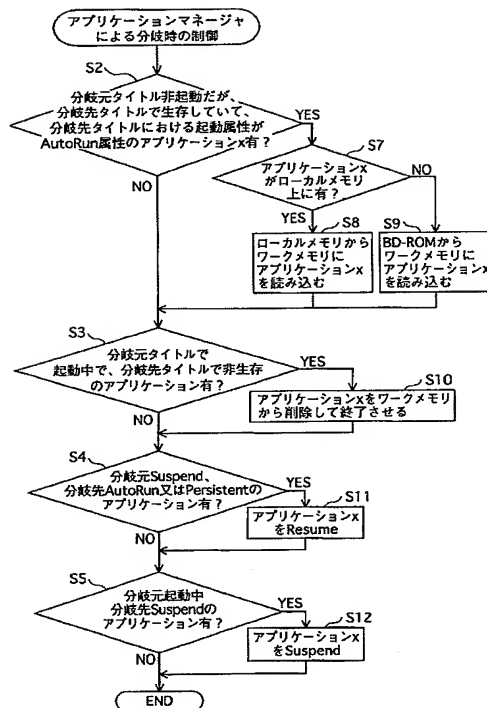
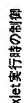
【図 19】



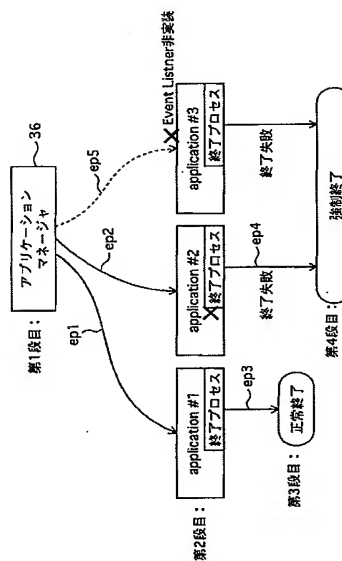
【図 20】



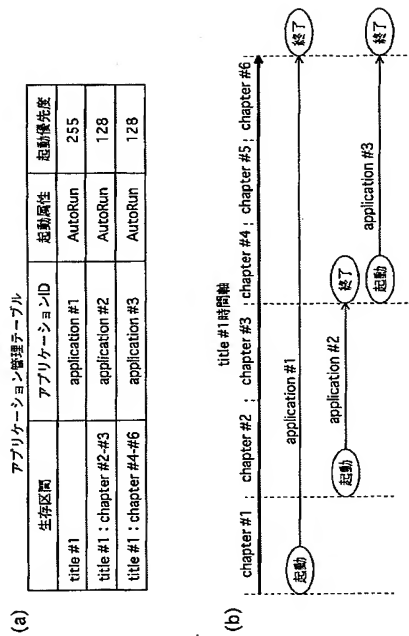
【図 22】



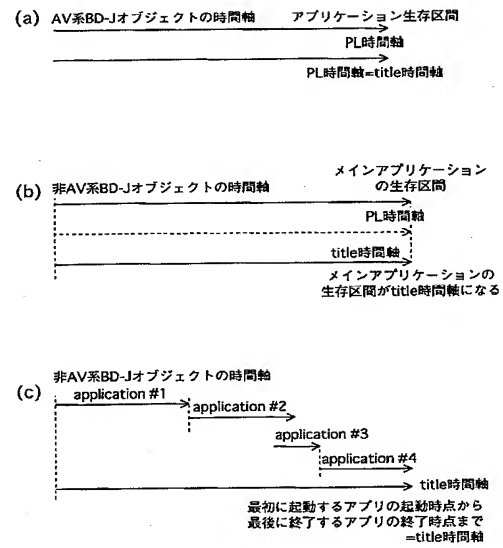
【图 24】



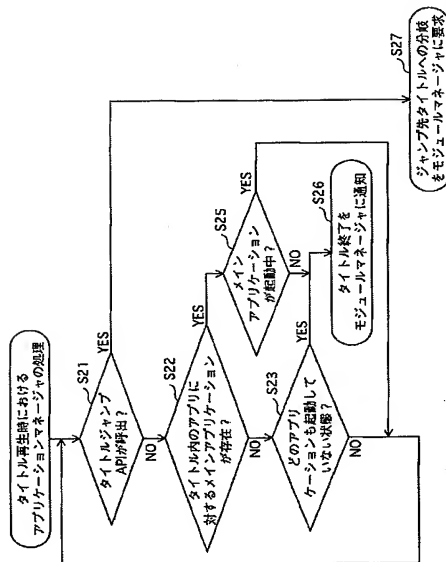
【図 25】



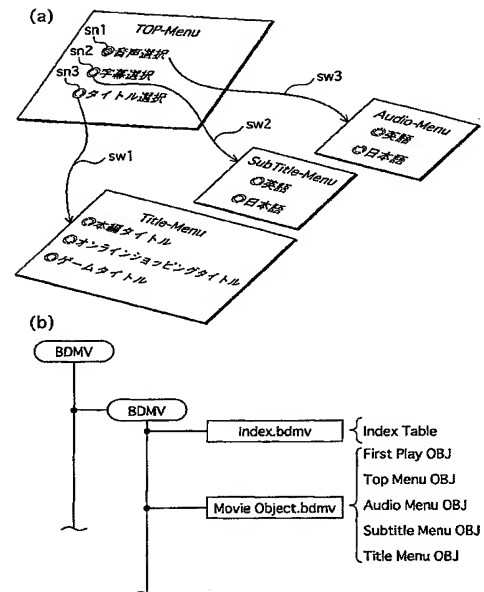
【図 26】



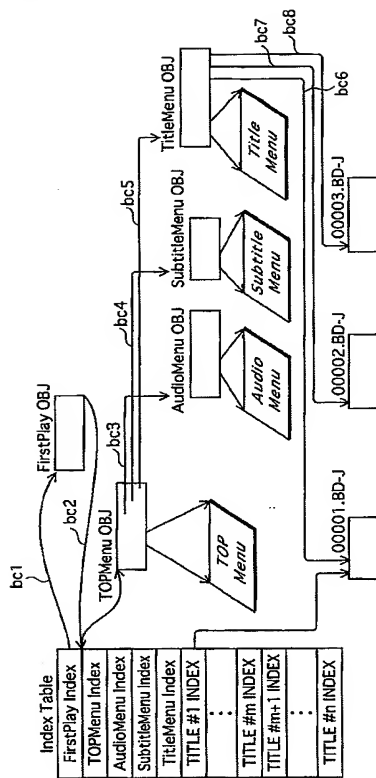
【図 27】



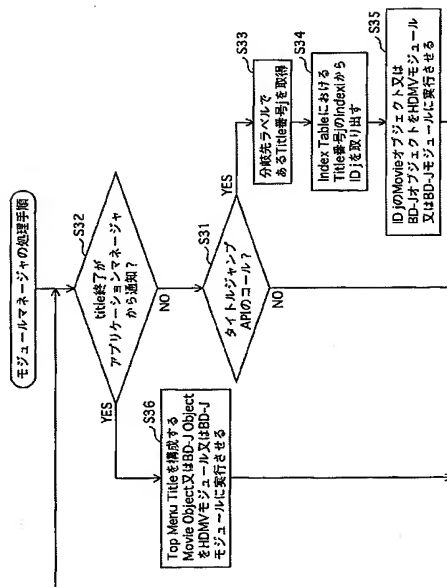
【図 28】



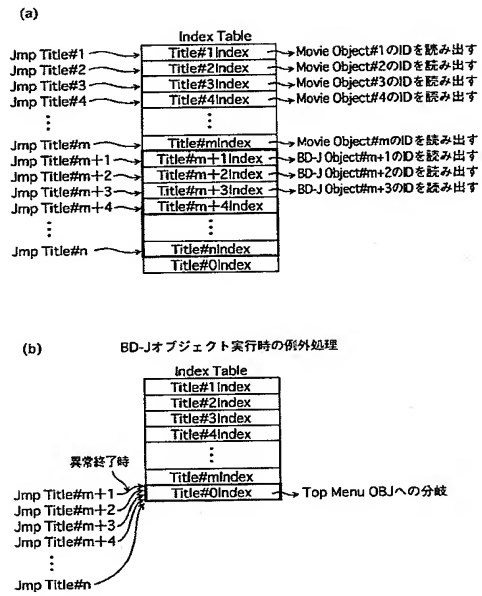
【図29】



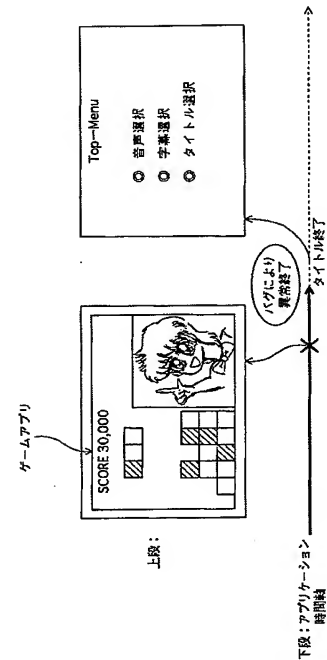
【図31】



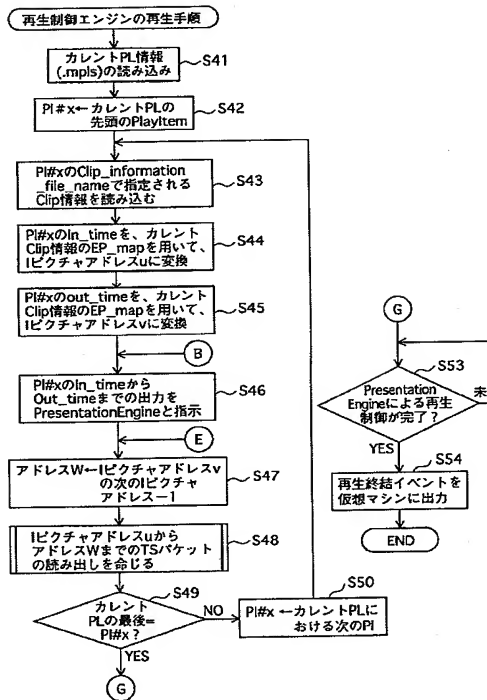
【図30】



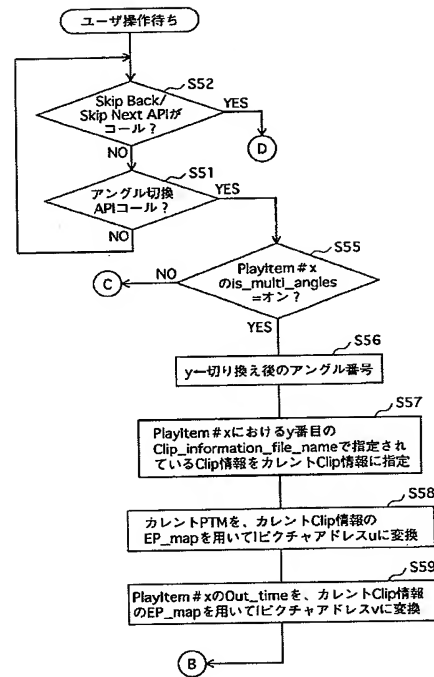
【図32】



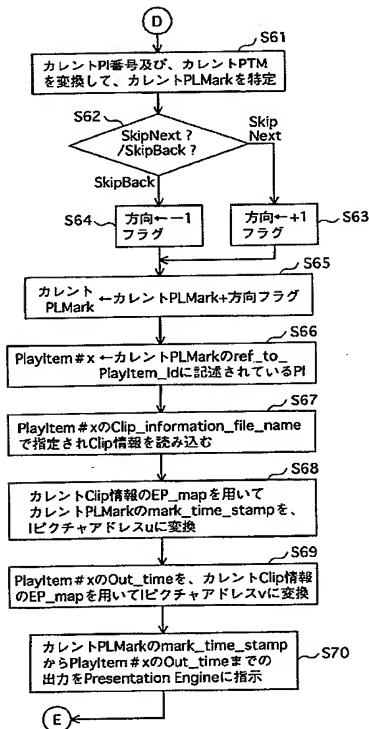
【図 33】



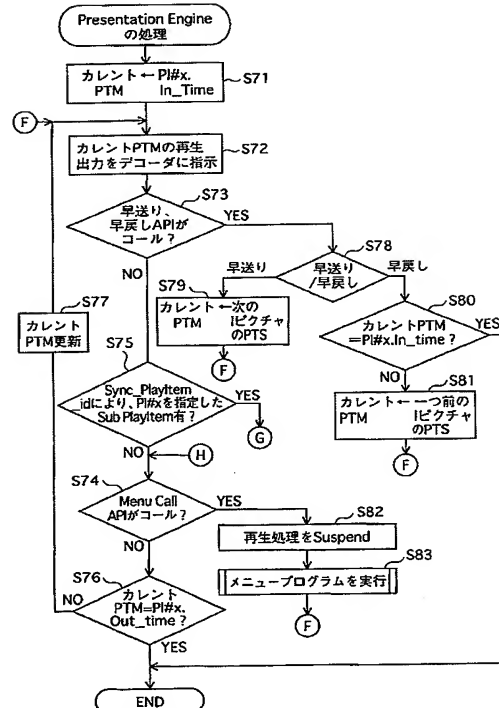
【図 34】



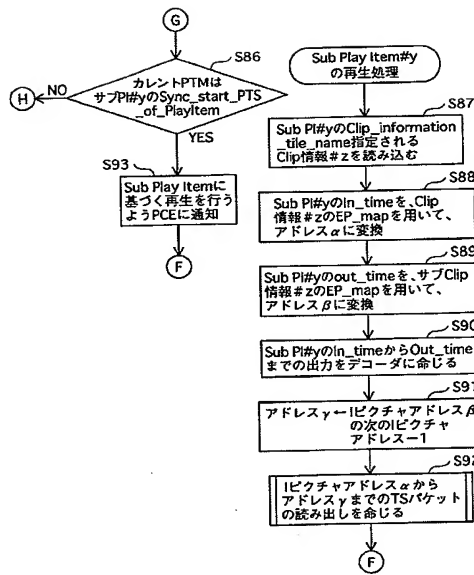
【図 35】



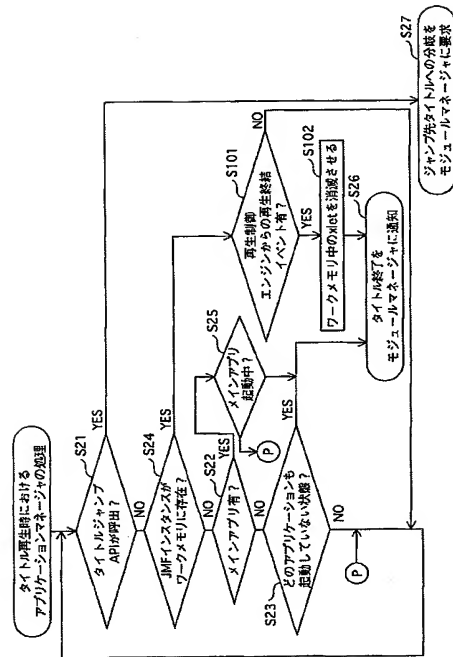
【図 36】



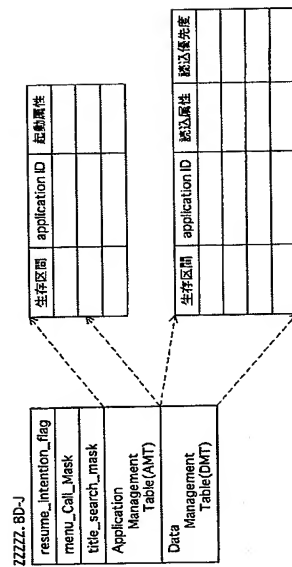
【図 37】



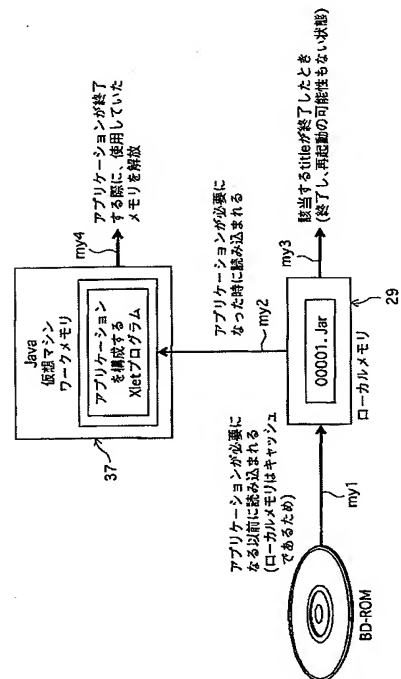
【図 38】



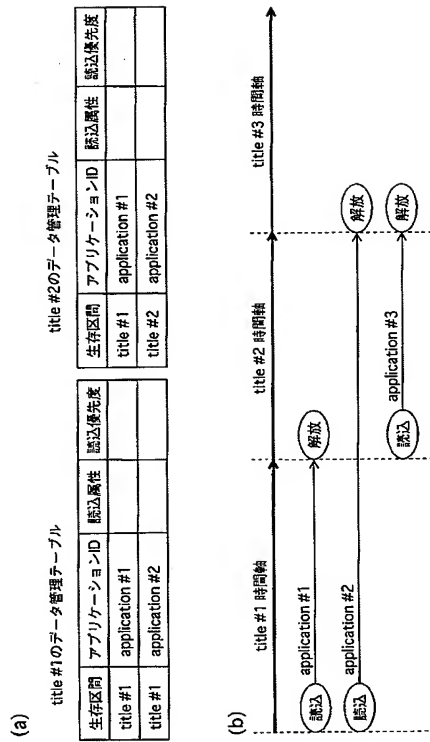
【図 39】



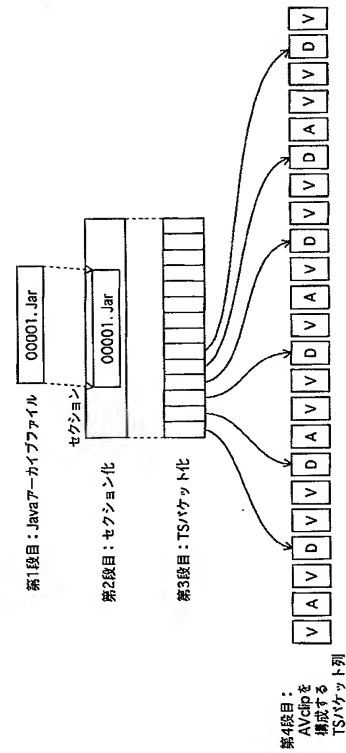
【図 40】



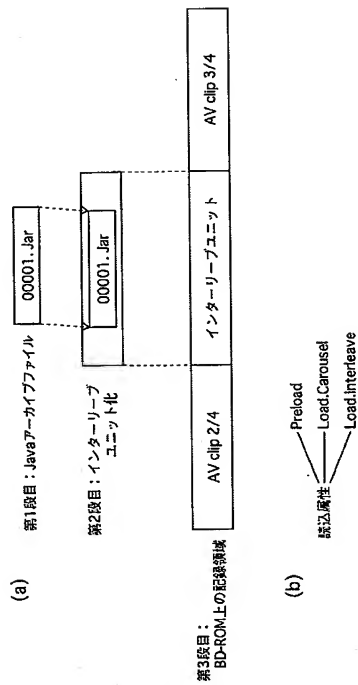
【図 4 1】



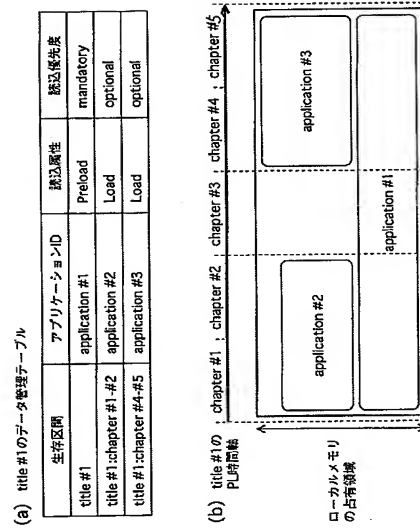
【図 4 2】



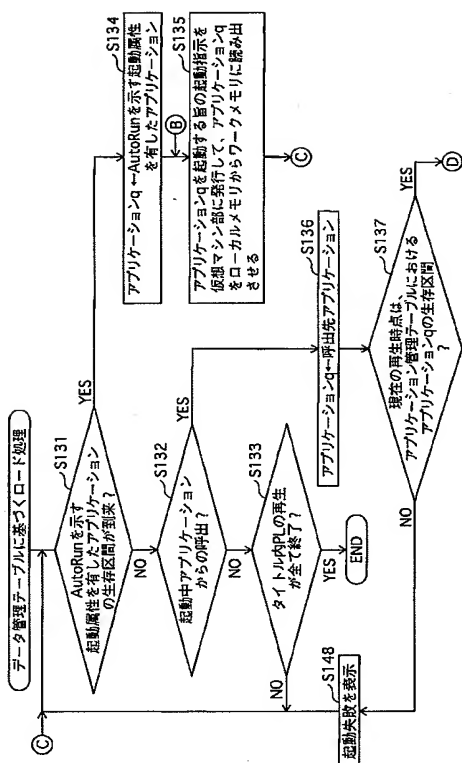
【图 4 3】



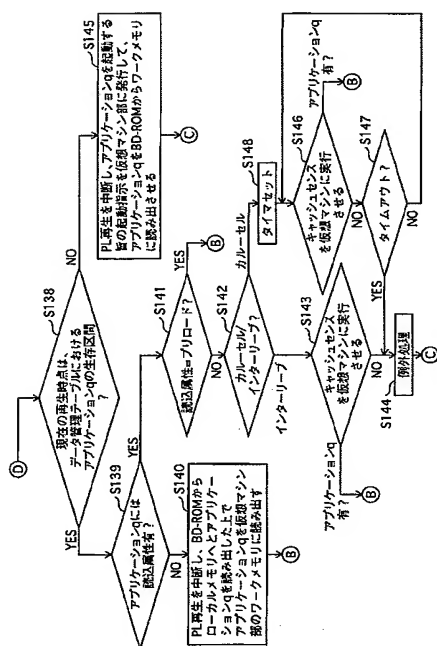
【图 4 4】



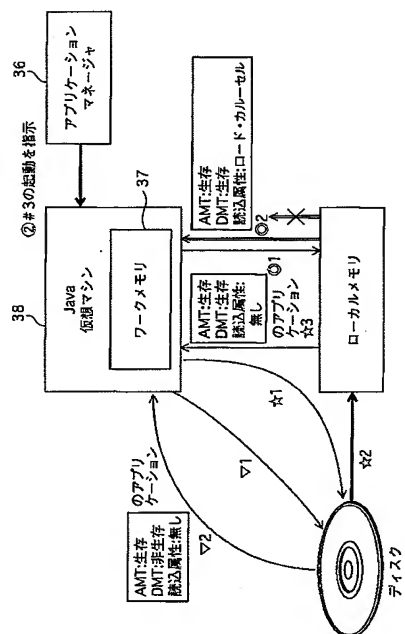
【图 49】



【図 50】



【図 5 1】



【図 5 2】

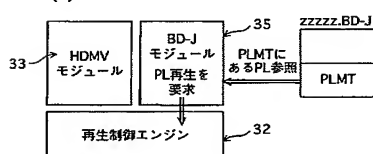
- (a) ZZZZZ. BD-J

resume_intention_flag
menu_Call_Mask
title_search_mask
Application Management Table(AMT)
Data Management Table(DMT)
PlayList Management Table(PLMT)

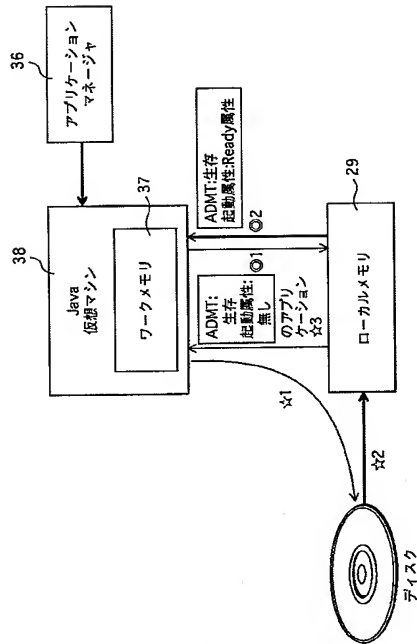
(b) PL管理テーブル

プレイリストID	再生属性
--	Auto Play
--	--

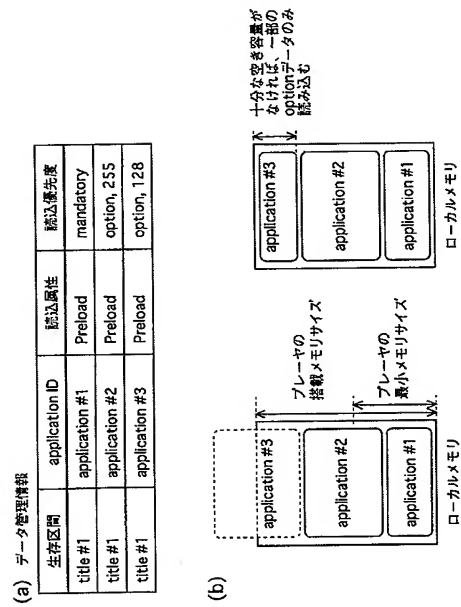
(c)



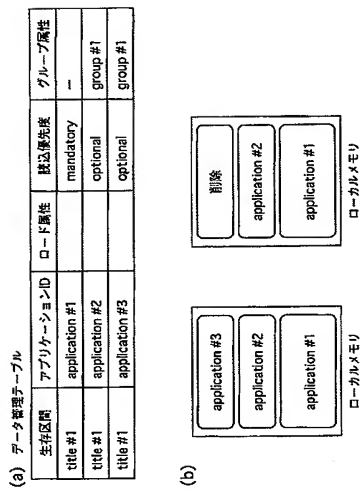
【図 57】



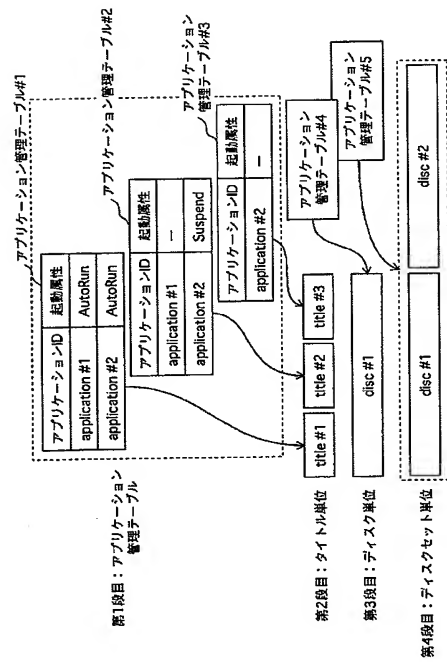
【図 58】



【図 59】



【図 60】



フロントページの続き

(72)発明者 岡田 智之

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器産業株式会社内

審査官 前田 祐希

(56)参考文献 国際公開第2005/036554 (WO, A1)

特開平06-004166 (JP, A)

特開平06-230946 (JP, A)

特開2002-369154 (JP, A)

特開2003-249057 (JP, A)

特開2001-238161 (JP, A)

特開2002-057990 (JP, A)

特開2003-248637 (JP, A)

特開2004-206863 (JP, A)

(58)調査した分野(Int. Cl., DB名)

G11B 20/10

G11B 27/00

H04N 5/91-5/95